

日本独文学会

2006年 春季 研究発表会

研究発表要旨

2006年 6月 3日(土)・6月 4日(日)

第 1 日 午前 10 時より

第 2 日 午前 10 時より

会場 学習院大学

目次

第1日 6月3日(土)

ドイツ語教育部会講演会 (13:20~14:20) ... 7

A会場:百周年記念会館正堂

講演:望ましい言語テスト —英語教育およびテスト理論の立場から

静 哲人 (関西大学外国語教育研究機構)

シンポジウム I (14:30~17:30) ... 8

A会場:百周年記念会館正堂

ゲルマニスト以外の学生に1年間で何をどう教えるか?

教養教育でのドイツ語授業の意義と方法を考える

Deutschlernen für ein Jahr? Warum und Wozu? Was kann und soll der Unterricht für Nichtgermanisten erreichen?

司会:清野 智昭, 星井 牧子

第1部:「そもそもなぜドイツ語を学ぶことが必要なのか?」

パネリスト:境 一三, 神尾 達之

第2部:「学生に1年間, 週2コマで授業をする場合, 何を教えるか?」

パネリスト: 安岡 正義, 鍛冶 哲郎, 板山 眞由美,

Stefan Hug, 太田 達也

口頭発表:文学1 (14:30~16:45) ...10

C会場:西2号館3F・301

司会:関本 英太郎, 木村 高明

1. 1950年代のラジオドラマ番組史の試み 小林 和貴子

2. 「ドイツ文筆家保護連盟 (Schutzverband Deutscher Schriftsteller)」

の活動史(1909-1933)—文学の社会史的考察—

真貝 恒平

- | | | |
|------------|---------------------------|-------|
| 3. 石のみちのり | —ツェラーンにおける死者たちの位相 | 田中 亜美 |
| 4. ハイネという傷 | —20 世紀ドイツ・ユダヤ文学における受容の一側面 | 関口 裕昭 |

口頭発表:文学2 (14:30~16:10) ... 13

D 会場:西2号館4F・401

司会:桑原 ヒサ子, 川口 眞理

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 1. カフカ『失踪者』とロビンソン・クルーソー | 高野 佳代 |
| 2. リルケとカフカ リルケの『始原の音』とカフカの『ヨゼフィーネ』 | 河中 正彦 |
| 3. 市民社会のカサノヴァ | 荒又 雄介 |

口頭発表:語学 (14:30~16:45) ... 15

E 会場:西2号館5F・501

司会:伊藤 眞, 平井 敏雄

- | | | |
|--|---------------|-----------------|
| 1. 古ザクセン語における完了形について | —Heliand を例に— | 本多 修一 |
| 2. ドイツ語の使役交替と他動性 | | 青木 葉子 |
| 3. Eine semantische Theorie der Emotionswörter | | Markus Böckmann |
| 4. 「羊」の語源について | | 鹿兒嶋 繁雄 |

口頭発表:文化・社会1 (14:30~16:45) ...19

F 会場:西2号館5F・502

司会:渋谷 哲也, 鎌倉 澄

- | | | |
|--|---------------------------------|-------|
| 1. アドルフ・アッピアとエミール・ジャック＝ダルクローズ | 杉浦 康則 | |
| 2. モンタージュと幼年期:Th.W.アドルノの後期美学における
映画の位置をめぐって | 竹峰 義和 | |
| 3. 異界が口をあけるときの | —ハーメルンの笛吹き男伝説にみる
夏至にまつわる世界観— | 溝井 裕一 |
| 4. ヘルマン・コーエンと初期ベンヤミン | 向井 直己 | |

ポスター発表 (14:30~17:30) ... 21

G 会場: 西2号館5F・504/505/506

(ポスター発表は同時進行です)

- ・身体のリズムとは何か – 世紀転換期における体操とダンス
熊谷 哲哉 (504)
- ・現存する8つの「学生牢」・写真パネル展示
長友 雅美 (505)
- ・虐げられた民族の英雄への賛歌 – ローベルト・シューマンによる
ショパン批評「作品Ⅱ」再考 –
佐藤 英 (506)

第2日 6月4日(日)

シンポジウムⅡ (10:00~13:00) ... 25

B 会場: 百周年記念会館小講堂

ドイツ語標準語の諸相 – その歴史と現状 –

Aspekte der deutschen Standardsprache: Entwicklung und Gebrauch

司会: Angelika Werner, Manabu Watanabe

1. Entwicklungstendenzen der neuhochdeutschen Standardsprache
am Beispiel des Lexikons M. Gabriela Schmidt
2. Der Stellenwert des „Dativ-Causees“ im Deutschen Susumu Kuroda
3. Die Satzstellung im Mittelfeld im Hinblick auf ihre Varianz
Itsuko Tokita
4. Standard unter medialem und konzeptuellem Aspekt:
Mündliche und schriftliche Sprache Angelika Werner
5. Verhalten der (medial geprägten) Umgangssprache
gegenüber der Standardsprache Manabu Watanabe
6. Wie man zwischen verschiedenen Formulierungsoptionen
auswählt Frank Mielke

シンポジウムⅢ (10:00~13:00)

... 33

A 会場: 百周年記念会館正堂

旅行文学と移民文学 – 文化人類学の視点から

Reise- und Migrationsliteratur. Kulturanthropologische Perspektiven

司会: Keiko Hamazaki, Yumiko Washinosu

1. Begrüßungszeremonien in der deutschen Reiseliteratur
des zweiten Entdeckungszeitalters Gabriele Dürbeck
2. Beschreibung des „First Contacts“ in der deutschsprachigen
„Migrantenliteratur“ Keiko Hamazaki
3. Reiseführer des 18. Jahrhunderts. Eine Analyse der Funktion
der Berichtstopoi in der Reiseliteratur Kotaro Yoshida
4. Warum in Japan alles anders ist. Zur kulturanthropologischen
Dimension von Topoi in deutschsprachigen Japan-Beschreibungen
Thomas Pekar
5. Last contact: Reisen in die Katastrophe. Zum Erkenntniswert
medialer Verschiebungen in Untergangsszenarien Christine Ivanović

口頭発表: 文学3 (10:00~12:15)

... 38

C 会場: 西2号館 3F・301

司会: 青木 敦子, 山本 洋一

1. ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』における
「友情」の主題 浅井 英樹
2. シラーの系譜学的思想 本田 博之
3. Die Welt als Wille und Vorhang: Kleists dramatischer Stil
und Fichtes „Die Bestimmung des Menschen“ Michael Mandelartz
4. グリム兄弟のポエジー概念とゲーテの形態学 村山 功光

口頭発表:文化・社会2/ドイツ語教育 (10:00~12:15) ...41

E 会場:西2号館5F・501

司会:飯田 道子, 草本 晶

1. 大学南校の1871年刊行のドイツ語教材について 城岡 啓二
2. 初年次教育におけるコンピューター支援協調学習(CSCL)の
効果と問題点 森 朋子
3. 外国語履修者の意識と語学教育評価 —北星学園のドイツ語
教育— 佐藤 修子
4. Unverbindliche Besuche in Alltagssituationen - Ein Versuch
zur Nachhaltigkeit des Deutschlandjahres in Japan Rudolf Reinelt

口頭発表:文学4 (10:00~11:40) ... 44

F 会場:西2号館5F・502

司会:柴崎 隆, 下寄 正利

1. ヘルマン・プラウト『日本語読本』について —口語体日本
文学の紹介者 志村 哲也
2. Das Freundschaftsbild in der frühaufklärerischen Komödie:
„Freundschaft auf der Probe“ C. F. Weißes im Spiegel
der „moralischen Vorlesung“ Gellerts Ekiko Kobayashi
3. Die Erzählstrategie gegenüber dem Publikum. Zum achten
Buch von Wolframs „Parzival“ Chihiro Izumiya

ポスター発表 (10:00~13:00) ... 46

G 会場:西2号館5F・504/505

(ポスター発表は同時進行です)

- ・検定試験と留学制度のあるドイツ語コース —小樽商科大学
の場合 大塚 譲(504)
- ・Face-to-face im Netz. Video-Tandems im DaF-Unterricht
Marco Raindl(505)



百周年記念会館正堂 (A会場)

日本独文学会総会・授賞式，ドイツ語教育部会総会・講演会
シンポジウム I，シンポジウム III

百周年記念会館小講堂 (B会場)

ドイツ語学文学振興会総会・授賞式，シンポジウム II

百周年記念会館 3F 会議室

「大学ドイツ語入試検討委員会」展示・発表

百周年記念会館 3F 小講堂

懇親会

西2号館 3F・301 (C会場)

口頭発表：文学 1，文学 3

西2号館 4F・401 (D会場)

口頭発表：文学 2

西2号館 5F・501 (E会場)

口頭発表：語学，文化・社会 2 / ドイツ語教育

西2号館 5F・502 (F会場)

口頭発表：文化・社会 1，文学 4

西2号館 5F・504 / 505 / 506 (G会場)

ポスター発表

第1日 6月3日(土)

ドイツ語教育部会企画講演会 (13:20~14:20)

A 会場

望ましい言語テスト – 英語教育およびテスト理論の立場から

静 哲人

言語能力を測る場合に限らず、テストには「信頼性」「妥当性」「波及効果」を考える必要がある。信頼性は測定結果の安定性に関わる。妥当性は測定している「なにか」が意図と合っているかどうかに関わる。「波及効果」は授業その他への影響を指す。

入学試験などの利害の大きいテストはこの3要素を高いレベルで満たす必要がある。一方日ごろの小テスト、教室内テストでは何よりも波及効果を重視すべきである。

妥当性と波及効果の点から、母語に訳させる問題は是非とも避けるべきである。母語で説明させる問題もできれば避けるべきである。学習の早い段階から、目標言語で説明させる、あるいは説明を完成させる/選ばせる問題を出すべきである。

妥当性と波及効果の観点から、発音に関するペーパーテストは普段から実技試験を実施している場合のみ補助的に許容されるに過ぎない。

波及効果と妥当性の観点から、「本文の内容に一致しているものを～個選べ」という真偽判定問題は、必然的に表面的な問題が多くなり、悪くすると瑣末な問題になる傾向があるので避けるべきである。

波及効果、妥当性、信頼性の観点から、ひとつのステムに複数の選択肢が付随する形の、通常が多肢選択問題を用い、かつできる限り「樹」のみでなく「森」に関わるような問題を出題すべきである。

波及効果と妥当性の観点から、正解選択肢は本文該当部分をそのまま用いてはならない。

妥当性の観点から、選択肢はすべて類似の長さであるのが望ましく、本文を読まなくとも背景知識で解答できるものではなく、誤答選択肢に all; every, always, never 等の語句を用いるのを避けるべきである。

信頼性は問題数の関数である。よって 1 問あたりの選択肢数を増やすよりも、問題数を増やすことを考えるべきである。例えば、4 肢選択の問題を 30 個出すよりも、3 肢選択の問題を 40 個出したほうが、得点の信頼性は間違いなく高い。全くランダムに解答する受験生は実はほとんどいない。

シンポジウム I (14:30～17:30)

A 会場

ゲルマニスト以外の学生に1年間で何をどう教えるか？
教養教育でのドイツ語授業の意義と方法を考える

Deutschlernen für ein Jahr? Warum und Wozu? Was kann und soll der Unterricht für Nichtgermanisten erreichen?

司会: 清野 智昭, 星井 牧子

大綱化以来、各大学のドイツ語の授業時間数は減少の一途をたどっているが、国立大学の独立行政法人化が加わったことにより、効率という物差しでドイツ語教育が測られるようになってきている。なぜ、大学としてドイツ語を提供しなければならないのか。そして、特に独語独文学専攻以外の学生に対して、与えられた時間内で、何を目標にし、何を教えるか。この問題は我々ドイツ語教師にとっては常に切実なものである。このテーマについては、すでに教育部会企画シンポジウムなどでも議論されているが、今回はあらためて、理事会と教育部会の合同シンポジウムとし、問題意識を学会員全体で共有するきっかけとしたい。以下では、議論を円滑に進行するために、各パネリストの主張を手短にまとめた。

第1部:「そもそもなぜドイツ語を学ぶことが必要なのか？」

1. 日本の高等教育における言語(教育)政策の視点から

境 一三

中等教育で英語以外の教育が行われていない以上、L3(日本語、英語に次ぐ第三言語)の教育は大学でやらざるを得ない。

日本の中堅層以上を育てなければならない高等教育では、L2としての英語教

育だけでは足りない。

文化・学問の蓄積と世界政治・経済に果たす役割からいって、ドイツ(並びにドイツ語圏)の政治, 経済, 社会, 思想は重要な学習の対象であり, これらを学ぶことは大学における基礎・教養教育の根幹をなす。

2. sollen から wollen へ

神尾 達之

第二外国語のなかでのドイツ語の重要性を, 教養の言説にたよらないで, より説得力ある形で正当化しなければならない。

ドイツ語の必要を説くよりも, ドイツ語が必要になる状況を人工的に作り出すことが重要だ。

第2部:「学生に1年間,週2コマで授業をする場合,何を教えるか?」

1. ドイツ語教育の標準化

安岡 正義

授業内容を標準化し, 担当教員が誰であれ共通の必須事項を中心に教育することが求められている。

「学生の主体的学習意欲及びその学習成果を積極的に評価」することを狙いとして, 外部試験(ドイツ語の場合は独検)を卒業要件単位として認める。

2. ドイツ語の強みは何か?

鍛冶 哲郎

ドイツ語が教養教育で存在意義を主張できるとすれば, それは言葉として蓄えられている文化の豊かさによる。つまりドイツ語がかかえる教育資源は豊富である。

その資源は読むことを通して最も有効に活用できる。読むためには, まず文法を学ぶ必要がある。

3. 教科書の条件

板山 眞由美

教科書は, ①ドイツ語の基礎をなるべく無理のない進度で教え, ②ドイツ語, ドイツへの関心を喚起し, ③クラスメートとの交流, 教師との交流をはかるためのものである。

教科書は, ①具体的なテーマや状況設定(舞台設定)を提供し, ②練習のやり方, あり方についても, 具体的な「道しるべ」の役割を果たすものである。

4. 文法は暗記より理解

Stefan Hug

外国語学習を動機づけるには学習成果が上がる必要がある。

週2回、クラスサイズ 30 人以上という条件下で学習成果を上げるためには、授業外での自律学習が不可欠だが、学生にはそれに必要な(メタ)文法的基礎が欠けている。

従って、授業では文法ではなく、文法習得の基礎を学生に教え、学生は言語の機能を理解することが必要となる。

5. <学び方を学ぶ>場としてのドイツ語学習

太田 達也

大学における外国語教育は、学習者が将来ふたたび外国語の勉強に従事することとなったときに役立つ「外国語の学び方」の習得をも視野に入れるべきである。

そのためには、学習にはさまざまな方法があることを、学習者・教師の双方が深く理解し、自らの持つ「ビリーフ」を相対化させることが必要である。

教師は「学習環境設計者」たる言語教育のプロとして、学習者が主体的に能力を獲得していく環境を、科学的研究の成果を基礎にデザインするべきである。

口頭発表:文学1 (14:30~16:45)

C 会場

司会:関本 英太郎, 木村 高明

1. 1950年代のラジオドラマ番組史の試み

小林 和貴子

当発表は1950年代に北西ドイツ放送局および北ドイツ放送局で放送されたラジオドラマを番組史的観点から捉える試みである。当時、北(西)ドイツ放送局には週2~3のラジオドラマ放送の枠があり、再放送も含めて年に100~140の作品が放送されていた。従って膨大な数の作品が研究対象となるのだが、これらはテーマ別に以下の9ジャンルに類型することが可能である。①責任と罪・第二次世界大戦, ②冷戦, ③経済の奇跡, ④家族, ⑤愛, ⑥人間性, ⑦キリスト教, ⑧社会批判, ⑨サスペンスである。発表ではそれぞれのジャンルの典型的な例をいくつか取り上げ、その作品の中心的テーマをなす「葛藤」とその葛藤が解消される過程に注目して、主人公の人物像や物語展開およびメッセージに

関するジャンル固有の要素を明確にする。この分析を通してそれぞれのジャンルが担っていた社会的機能を明らかにすることが発表の目的である。1950年代のラジオドラマに関する従来の番組史研究では、番組の政治的側面ばかりが注目され、内省化(verinnerlicht)あるいは非政治化された(entpolitisiert)当時のラジオドラマ番組の体制支持的性格が批判されてきた。しかし幅広い聞き手の支持を得た当時のラジオドラマに、積極的な社会的機能を読むことも可能である。例えば当時のラジオドラマには人々の願望を擬似的に満たすという機能があった。

2. 「ドイツ文筆家保護連盟 (Schutzverband Deutscher Schriftsteller)」の活動史(1909-1933)

— 文学の社会史的考察 —

真貝 恒平

ドイツの作家、ジャーナリストを含めた「文筆業」(Schriftstellertum)に携わる人々(文筆家: Schriftsteller)によって結成された「利益団体」の歴史に関する研究は、1970年代後半になってドイツで注目を集めるようになった。これらの研究はどれも、文筆家団体の成立、存続、そして解体へと至る歴史的現象を当時のドイツ社会全体を巻き込んだ社会変革の事例の一つとして捉えている。私の研究対象である「ドイツ文筆家保護連盟」(Schutzverband Deutscher Schriftsteller: 略称 SDS)は、1909年に結成され、当時ベルリンで活動していた文筆業を本業とする「職業文筆家」(Berufsschriftsteller)を構成員とする組織であり、文筆家の経済的苦境を打破することを目標に掲げていた。1920年からはその組織名にさらに「ドイツ文筆家労働組合」(Gewerkschaft deutscher Schriftsteller)という呼称が加わり、当時、組織活動において主流であった「労働組合」へと組織転換を果たしている。1933年のナチスによる権力掌握以降は、その傘下に創設された組織「ドイツ文筆家帝国連盟」(Der Reichsverband Deutscher Schriftsteller: 略称 RDS)に吸収合併され、職業団体としての自立性を失ってその活動に幕を閉じる。

発表では、SDS独自の機関紙や刊行物、さらには会員である文筆家たちを紹介しながら、結成から解体に至るまでの1909～33年までのSDSの活動を概観する。そして、SDSの活動史が、文学史の単なる断片ではなく、この時代の「政治・経済・文化」と「文学」の相互作用を探る上で格好の例証であり、SDSがこれらへ果たした貢献は極めて大きいことを示したい。

3. 石のみちのりーツェラーンにおける死者たちの位相 田中 亜美

パウル・ツェラーンは詩のなかに石(砂, 岩)のモチーフを数多く用いているが, 初期と中期以降の詩では形象のあらわれ方や意味内容にあきらかな差異が存在する。初めは流動的な「砂」は次第に凝固して「石」と化してゆく。それは「石」という事物の領域が, 言語論的な領域と絡み合い相互浸透する過程と軌を一にしているのだ。

このようなメタ詩としての詩を可能にさせる「石」のモチーフについては, ツェラーンがその翻訳を手がけたロシアの詩人オシップ・マンデリシュタームの同名の詩集『石』から影響を受けていたことに留意する必要がある。ツェラーンはマンデリシュタームの詩について, 固有の一回的な時間の体験と結びついた詩のことばの「現象的性格」, なかでも「時間の中へと入り込む」のが詩の場所であると論じている。詩のことばは, さまざまな時間の位相を総合し, 再現前させるものであるが, 石もまたその地質学上の層形成ということに鑑みて, さまざまな年代の時間の層をいま・ここに現前させる働きをしている。その意味で詩のことばは石に置き換えることができるのである。ツェラーンの詩において時間の問題は, 今は亡き死者たちを, 詩のいま・ここへと召還して再現前させるという追悼の作業と深い関係を持っている。追悼の作業は「石」のモチーフのなかに明確なかたちで踏襲され, 「石」は「墓碑」そのものとして機能する。それは死者たちの表象可能性／不可能性をめぐるメタ詩的な問題意識にも繋がろう。本発表は, ツェラーンのマンデリシュターム論およびこの論が書かれたのと同時期の詩をとりあげながら, 「石」のモチーフの独自性を探るものである。

4. ハイネという傷 —20 世紀ドイツ・ユダヤ文学における

受容の一側面

関口 裕昭

本年, 没後 150 年を迎える Heinrich Heine と Judentum との関連は, 1970 年代の Kircher や Rosenthal らの研究以降, 急速に解明が進められている。しかしそれに先行して, すでに多くのユダヤ系作家によって, 早くから文学作品の中にハイネ像が受容されて来た。

ハイネにおける Judentum 理解が進んだ背景には, 研究者たちの実証的研究だけでなく, 特にユダヤ系作家たちの受容を手がかりにして, いわば遡及的にハイネのテキストに隠された意味の機微が読み取られたことも看過できない。ハイネにという原点があって, それが年代を追って受容されてきただけでなく, 逆に, 20 世紀ドイツ・ユダヤ文学という光源からハイネの問題系を新たに照射し, 理解の再構築がなされたと見られる。

本発表では、批評家や作家のハイネ像を、K. Kraus, Max Brod から Adorno や Reich-Ranickiらに至るまで、20世紀の文学思潮に照らしながら批判的に略述する。その際、特にこれまで十分に解明されてこなかった Paul Celan におけるハイネ受容に注目したい。最近公表された書簡や蔵書の書き込み等の調査を通して、ユダヤ人であることとドイツ語で詩を書くことの矛盾点、ツェランがハイネを通してどう受け止め、詩作へと転換していったかを考察する。

ハイネという「傷」を通して、ドイツ・ユダヤ文学は痛々しくも豊かな、時空を越えたひとつのテクスチュアを形成しているのではないだろうか。

口頭発表：文学2（14:30～16:10）

D 会場

司会：桑原 ヒサ子，川口 眞理

1. カフカ『失踪者』とロビンソン・クルーソー

高野 佳代

テオドール・アドルノは、フランツ・カフカの散文全体を「完璧なロビンソナーデ（ロビンソン変形譚）」と評し、マルト・ロベールは、長篇『失踪者（アメリカ）』を、新大陸を「孤島」に見立てた冒険小説であると解した。だが、この指摘を承けてカフカ文学とデフォーの『ロビンソン・クルーソー』の関係を本格的に取りあげて論じた研究は従来なかった。しかし『失踪者』の雛型であるディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』には、デフォー作品への言及が繰り返される。またカフカ後年の日記や手紙にしばしば現れる、ロビンソン像は、孤島を一人で「わが家」に作り変えた点よりも、むしろ、孤島から「救い出され」て、再び「わが家に帰る」という契機が強調されている。そこで、「家」のモチーフに注目しつつ『失踪者』とデフォー作品とを比較すると、後者におけるロビンソンとフライデイとの男同士の関係、そして女性を徹底的に排した生活が、女性および「家」からの追放と逃走を繰り返す『失踪者』の主人公カール・ロスマンと「アイルランド人」ロビンソンの関係に反映していることがわかる。ただし、ここでのロビンソンは、むしろ主人公を「女性」の「家」に留まらせる機能を果たす。その点で『失踪者』は、女性との関わりという契機を作品世界に持ち込んだ、特異なロビンソナーデであるといえる。それは、デフォーの作品が体現しているような植民地主義、ひいてはその一形態であった当時のユダヤ人国家建設運動へのカフカなりの応答であったと考えられる。

2. リルケとカフカ リルケの『始原の音』とカフカの『ヨゼフィーネ』

河中 正彦

リルケは『始原の音』(SWVI 1085-1093)で、人間の頭蓋の中心を走る冠状縫合線を、レコードのギザギザの音溝に見立てて、そこにレコードの針を走らせたなら、一体どんな音が生まれるか、という一種残酷な着想を弄んでいる。頭蓋のドームは、発語以前の「沈黙」の完全性の象徴であり、そこに「罅」が走った時こそ、発語の瞬間の象徴と見なしうる。リルケは本文で<Ur-Geräusch>(源一雑音)という語を用いながら、そこから生まれるのは、「ひとつのメロディー、ひとつの音楽」(SWVI 1090)に違いないと書いている。

この矛盾は、カフカにおいては、Zischen と Pfeifen の二項対立に対応する。『巢穴』の Zischen は、Geräusch とも呼び替えられているが、他方「ヨゼフィーネ」の Pfeifen は決して<雑音>とは呼ばれず、<音楽>と見なされている。しかも『巢穴』と『ヨゼフィーネ』の双方で、両者は相互に移行可能なもののように描かれている。『巢穴』の Zischen は、「ある時はシューシュー、ある時はむしろピーピー」(N II 607)というように、どちらも取れる両義的な音である。『ヨゼフィーネ』においても、ネズミの子供は pfeifen できない限りで、<zischen>する(N II 666)とされている。この両義性こそ、沈黙から生まれる詩的言語が、いわゆる交信言語と違って、沈黙と言語の境界領域を浮遊する、前-言語的な要素を自己内に保存していることの象徴と考えられる。

3. 市民社会のカサノヴァ

荒又 雄介

19 世紀の終わりから十数年間、ドイツ語圏の文学に、カサノヴァを登場人物とする作品が数多く現れる。世紀末の雰囲気を濃厚に湛えたホーフマンスタールの抒情劇から、第一次大戦のさなかに書かれたシュニッツラーの作品を経て戦間期に至るまで、誘惑者のモチーフは、時代の変遷と歩みを共にしながら様々な面を見せる。

「誘惑者」から、まず連想されるのはドン・ファンであろう。しかし、前述の時代は、いわばカサノヴァ復権の時代であった。スペイン・バロック伝説の暗い情念は影をひそめ、ロココの風俗が華やかに描かれる。人々が求めたのは、破滅型の誘惑者の孤独で悲壮な姿ではなく、享樂的な山師の人生の豊かさであった。当時の作品を見ると、二つの願望がカサノヴァに投影されていたことが分かる。一つは市民的規範に縛られない自由な生活への憧れであり、これはもっぱら「結婚」と「家族」をテーマにして描かれる。二つ目は、芸術と人生の二者択一の克服である。波乱万丈の人生において、およそ文学と本気で取り組んだとも

見えないカサノヴァは、晩年にものした『回想録』によって、不滅の作家たちの仲間入りをする。文章の推敲に憔悴した近代の作家たちの目に、年老いた山師の姿は、芸術と人生の両方を手にした英雄に見えたのである。

本発表では、フランツ・ブライとエルンスト・リサウアーの作品を手がかりにして、成熟した市民社会の中でカサノヴァが放った輝きを描き出す。その際、作品一個の価値よりも、カサノヴァのイメージが複数のテキストの中で醸成されてきた経緯に注目したい。

口頭発表：語学（14:30～16:45）

E 会場

司会：伊藤 眞，平井 敏雄

1. 古ザクセン語における完了形について —Heliand を例に—

本多 修一

(1) 研究対象の説明

ドイツ語の完了形を形成する際、動詞の特性に応じて、haben 支配と sein 支配がある。通時的に見ると、古高ドイツ語時代に haben + 過去分詞という形が見られるが、この時期には、過去分詞に屈折語尾 (Flexionsendung) があり、haben + 過去分詞における haben には、「持つ」という語彙的な意味が認められ、haben + 過去分詞の形が文法化されたのは、後期古高ドイツ語 (Spätalthochdeutsch) から中高ドイツ語時代にかけてだとされている。古高ドイツ語時代には、他動詞や未完了相 (imperfektiv) の自動詞が haben 支配で、完了相 (perfektiv) の自動詞や移動を表す動詞が sein 支配という区別が見られる。

片や、古高ドイツ語と同時期の、低地ドイツ語の最古の言語段階である古ザクセン語 (古低ドイツ語とも呼ばれる) には、移動を表す動詞 (例えば, gehen 等) が hebbian (haben に対応) 支配であるケースが見られるなど、完了形形成の面で、古高ドイツ語と異なる点がある。

(2) 先行研究の成果との関係

Kotin (2000) の論文に拠ると、本来、haben + 過去分詞における過去分詞は目的語を修飾するという受動的な意味を持っていたが、Notker (950-1022) 以降、その受動的な意味は失われ、haben + 過去分詞構文は、能動態構文として解釈された結果、時称のカテゴリーに組み込まれ (S.336), sein + 過去分

詞構文については、本来、sein は他動詞の過去分詞と結びつき、受動態のカテゴリーに属していたが、次第に sein + 自動詞の過去分詞という形が現れ、sein + 過去分詞構文は、時称のカテゴリーにも属するようになったということである (S.334-335)。

本発表では、上記の完了形の成立過程を考慮に入れ、Heliand (M 写本) を資料に、古ザクセン語の完了形の用例、特に、古高ドイツ語で sein 支配であるケースが古ザクセン語では hebbian 支配であるケース (hebbian gegangen など) の用例を調査し、この現象について、言語内的な面と言語外的な面 (例えば、言語間接触) から考えたい。

(3) 口頭発表で主張したいテーゼ

従来の研究の中で、古ザクセン語、ないしは Heliand の言葉 (Heliand-Sprache) が北海ゲルマン語を土台にフランク方言との言語混合の影響を、音韻、形態レベルで、受けている、という仮説が主張されてきた。

本発表では、古ザクセン語に見られる完了形 (hebbian + gegangen など) を例に、統語レベルにおいても、言語混合過程 (Sprachmischungsprozeß) を想定することができるのではないかと、いうことを主張したい。

2. ドイツ語の使役交替と他動性

青木 葉子

状態変化のプロセスを使役的に捉えるか自発的に捉えるかという区別は、人間の認知上、基本的かつ重要なものであるが、この区別は、英語や日本語など多くの言語において、ふつう動詞の自他で表現される。(He opens the door. / The door opens.) これに対しドイツ語は、他動詞-自動詞用法 (Er zerbricht die Vase. / Die Vase zerbricht.) のみならず、他動詞-再帰動詞用法 (Er öffnet die Tür. / Die Tür öffnet sich.) も有するという点で特殊である。また、verkrümmen のような他-自と他-再の両方を許す動詞も存在する。これは一体なぜだろうか。本発表では、他-自および他-再の対応関係を「使役交替」、使役交替に現れる自動詞、再帰動詞をそれぞれ「能格自動詞」(Eintr.)、「能格再帰動詞」(Erefl.)と呼び、使役交替の成立条件について考察する。そして、Eintr.とErefl.が、他動詞・自動詞・再帰動詞で構成されるドイツ語動詞の意味体系に、どのように係わっているのかを議論する。

本発表の主張は次の3点である。まず、ドイツ語の自動詞・再帰動詞は、非対格性を基準とする意味的観点において、互いによく似た連続的構造を示すということ。その際に具体的な指標となるのは、主語の意味役割、意図性、完了の助動詞選択、再帰代名詞の指示性、動詞のアスペクトである。ふたつ目に、

使役交替に関して, Eintr.は「対象物に本質的変化があり, 結果状態が永続的で, 状態変化が不可逆的」な事態を表すのに対し, Erefl.は「対象物に本質的変化がなく, 結果状態が一時的で, 状態変化が可逆的」な事態を表すということ。最後に, ドイツ語動詞の意味的体系において, 自動詞のほうが再帰動詞より他動性の低い事態を表現する傾向にあり, このような傾向が, 使役交替における Eintr.と Erefl.の意味的役割分担に反映されているということである。

3. Eine semantische Theorie der Emotionswörter

Markus Böckmann

Wie kann man die Bedeutung von Emotionswörtern wiedergeben, ohne weitere Begriffe solcher Art zu verwenden? Im Laufe der Geschichte haben die wichtigsten Philosophen – wie Aristoteles [„Rhetorik“], Descartes [„Die Leidenschaften der Seele“], Spinoza [„Ethik“] und Hume [u.a. in „Treatise of Human Nature“] oder auch Sartre [„Skizze einer Theorie der Emotionen“] – die Emotionsbegriffe zu analysieren versucht. Eines der hierbei auftretenden Probleme ist jedoch, dass wir alle irgendwie Experten für Emotionen und Gefühle sind. Jeder weiß, was Gefühle sind, wie sie sich anfühlen, und folglich verstehen wir die philosophischen Analysen durchaus, aber in semantischer Hinsicht zufriedenstellend können diese nicht sein, da sie auf Grundemotionen beruhen. Dennoch kann man diesen Ansätzen eine wichtige Erkenntnis abgewinnen, die sich in den neueren linguistischen Beschreibungen ebenfalls zeigt: Emotionen sind intentionale Zustände und beruhen auf propositionalen Einstellungen. In besonderem Maße vertreten Searle (1991) und Wierzbicka [u.a. in (1999)] diese Ansicht, auch wenn die Analysen beider recht unterschiedlich sind, denn Searle geht nur von den Grundkategorien „Glauben“ und „Wünschen“ aus, während für Wierzbicka Emotionen kulturelle Artefakte sind, die man nur mithilfe Atomarer Prädikate und einer Universellen Syntax inhaltlich erfassen könne.

Meine grundlegende These zur Beschreibung und Definition von emotionalen Begriffen basiert auf den Forschungsergebnissen von Schachter und Singer (1962) sowie den neueren und neuesten Ergebnissen der Alexithymieforschung, welche den Ansatz Schachter und Singers stützen [u.a. von Rad (1983), Berthoz (2005), Damasio (2004)]: Emotionswörter besitzen zwei große Inhaltskomponenten, nämlich Körperreaktionen und

(Situations-)Bewertungen. Die Art der Bewertung bildet dabei das wichtigste Differenzierungsmerkmal zwischen den einzelnen Emotionen. Da Objekte, hier vornehmlich Situationen, emotional fokussiert und bewertet werden, sind Emotionen intentional.

Die Bewertungen selbst werden durch propositionale Kategorien beschrieben, die sich auf drei Ebenen verteilen. Die dritte und letzte Ebene liefert dabei die Motivation für Handlungen, die aus einem Gefühl erfolgen. Dies erlaubt eine genauere und umfassendere Analyse als die von Searle oder Wierzbicka vorgeschlagene, zumal im Gegensatz zu Wierzbicka Gefühle als anthropologisch konstant bzw. universell erachtet werden.

Diese Definitionsweise ermöglicht es also, die bisher gewonnenen Erkenntnisse der Philosophen und Linguisten zu integrieren und in einem größeren Rahmen zu erklären.

4. 「羊」の語源について

鹿児嶋 繁雄

語源辞書では「羊」の語源は不明となっている。ゴート語では「羊、子羊」は lamb で、現代語の Schaf に繋がる単語は古高ドイツ語 scâf である。語源辞典では、東ゲルマン語には Schaf に繋がる単語は存在しない、とある。

比較言語学でも「羊」語源は確定されていない。シュラーダーは「家畜」→「貨幣」バンベニストは逆に「貨幣」→「家畜」への意味の変化をギリシア語の πρόβαον「羊」を例に、この単語は本来「動産」の意味であって、「先をいくモノ」の意味ではない、と述べている。

ドイツ語の Schaf もバンベニストの主張するように本来「商業用語」であった、と思われる。

古いゲルマン語の語形を残しているフィンランド語では:「羊」lammas「子羊」pikku-lammas「小さい+羊」である。ゴート語の lamb はローマ帝国の貨幣経済との接触によって、必要に迫られて、ゴート語の時代から古高ドイツ語の時代に作られたと思われる。

現代語 Schaf に繋がる語形 schaft, schaf を男性・女性・中性について中高ドイツ語からゴート語まで遡って検証すると、当時のゲルマン人がローマ帝国の文明—宗教・軍事・商業—の用語を巧みにゲルマン語化した過程—耳から入ったことばによる誤解—が見えてくる。

口頭発表:文化・社会1 (14:30~16:45)

F会場

司会:渋谷 哲也, 鎌倉 澄

1. アドルフ・アッピアとエミール・ジャック＝ダルクローズ

杉浦 康則

ヨーロッパ演劇の改革者の一人, アドルフ・アッピア(Adolphe Appia)が活動の初期から抱いていた『ニーベルングの指輪』演出計画は, ようやく 1924/25 年に実現し, この演出においてアッピアの舞台理論が実践される。しかしアッピアの理論はすでに 1912/13 年, ヘレラウでの『オルフェオとエウリディーチェ』演出において実践されている。また, ヘレラウでの活動においてはエミール・ジャック＝ダルクローズ(Emile Jaques-Dalcroze)のリトミックがアッピアに影響を与える。そこで本発表では, アッピアの舞台理論及びダルクローズのリトミック, そして『オルフェオとエウリディーチェ』演出の様子を示した上で, 同時代の演劇改革者達の活動に照らし合わせた考察を試みる。

ヘレラウでのアッピアとダルクローズの活動を, 同時代の演劇改革者エドワード・ゴードン・クレイグ(Edward Gordon Craig)やマックス・ラインハルト(Max Reinhardt)等の活動と比較することで, 演出に使われた「群集」と「階段」に焦点が向かう。特に群集を使った演出及びその理論はラインハルトの名の下で有名であり, アッピアやダルクローズの主張についてはあまり言及されていない。本発表ではこれらの点に言及し, 群集演出はラインハルトによるものだけではないということ, さらに群集や階段について考察を加える中で見えてくる今後の課題を示す。

2. モンタージュと幼年期:Th.W.アドルノの後期美学における

映画の位置をめぐって

竹峰 義和

ハリウッド映画をはじめとする大衆文化を「文化産業」の名のもとに辛辣に批判する一方で, 真正なモダニズム芸術作品にたいしてのみ, 物象化された社会からのユートピア的な救済の可能性を見出した陰鬱な哲学者 —このようなテオドル・W・アドルノにまつわる人口に膾炙したイメージが, その広汎な知的営為の一つの顕著な傾向を言い表していることは確かである。しかし, 晩期のアドルノが構想した美学思想が, そうした二項対立的な図式にかならずしも収まるものではなく, 〈芸術としての映画〉という問題についても射程に収めていることは, し

ばしば見逃されてきた。本発表においては、「芸術と諸芸術 Die Kunst und die Künste」(1966)および「映画という透明画 Filmtransparente」(1966)における映画の美学的可能性をめぐる議論を、50年代に書かれたシュルレアリスム論や、遺著となった『美学理論』(1961-69)との関連のもとに検証することによって、映画メディアのモンタージュ的特性のなかにアドルノが、〈自然美〉の経験をテクノロジー的に再現するような契機を見出していたことを検証するとともに、さらに、そのような〈自然美〉の経験が、アドルノ美学において、幼年期の知覚と親和するものとして捉えられていたということを明らかにしていきたい。

3. 異界が口をあけるとき —ハーメルンの笛吹き男

伝説にみる夏至にまつわる世界観 —

溝井 裕一

(1) 研究対象

『ハーメルンの笛吹き男』伝説とその背後にある夏至の世界観について

(2) 先行研究の成果との関係

『ハーメルンの笛吹き男』伝説は、実際にあった子供失踪事件がもとになって形成されたといわれており、その原因として「ゼデミュンデの戦い」による戦死説や東方植民説(ヴァンとドバーティン)、事故・遭難説などがあげられてきた。さらに日本では、阿部謹也氏が中世における庶民の生活環境を浮き彫りにすることによって、伝説の背景を探求されている。

しかし私は、この伝説は形成当時の民衆の世界観があって初めて成立しえたものであったという観点から、事件とかかわりのある夏至の時期に焦点をあてつつ、伝説発生の背景についてアプローチを試みる。

(3) 口頭発表のテーゼ

1284年6月26日、ヨハネとパウロの日に、謎の楽師とともに大勢の子供たちが山へ赴き、そこに開いた穴を通して姿を消したという。

ここで注目すべき点は、事件発生の日時である。この日は夏至とほぼ重なり、その2日前にあたる24日には古くから火祭がおこなわれていたが(キリスト教化以降、夏至祭はヨハネの日とされた)、その時期には山や川に白い女、妖精、小人などが現れるとする伝説が集中しており、山が開いて異様な世界へ踏み入るといった話も多い。夏至には、この世とあの世の境目がなくなると信じられていたので、男が子供たちを山の奥の異界へさらっていったというこの伝説が生まれたのである。

本発表では、こうした伝説や、古代まで遡る地下世界への信仰などを視野に入れながら、『ハーメルンの笛吹き男』伝説の下地となった中世の世界観について

て考察していきたい。

4. ヘルマン・コーエンと初期ベンヤミン

向井 直己

この発表は、ヘルマン・コーエンとヴァルター・ベンヤミンの認識論の比較を課題とする。前者の『カントの経験の理論』『微分法の原理およびその歴史』『純粹認識の論理学』、後者の「来るべき哲学のプログラム」「言語一般および人間の言語について」「ドイツ悲劇の根源(とりわけ「認識批判的序論」)」等を対象に採り上げ、「経験」の概念(とその基礎)を軸として両者を媒介し、かつ対照を際立たせたい。その際、認識論としての言語理論を直接間接に両者が吸収した人物、つまり言語学者／民族心理学者 H.シュタインタールに触れ、それを各々が如何に乗り越えようとしたかを示すことで、両者の関連と差異とが明確になるものと思われる。

1990年代まで、両者の関係は互いの文脈において断片的にのみ取り扱われてきた。初めてこの問題を主題とした単著は『初期ベンヤミンとヘルマン・コーエン』(A.Deuber-Mankowsky)として2000年に刊行されたところであり、個別的な議論をそれぞれの体系的思考の枠組みのなかで考え直す試みには、なお多くの課題が残されていると言える。当面ここでは両者の思考の連続性よりはむしろ差異に注目し、コーエン研究の文脈においてベンヤミンという特異な継承者-批判者が担う意味を考えたい。

そこには経験の崩壊が見られないだろうか。コーエンにとってみれば転覆的な認識の理論が打ち立てられるとき、コーエンと彼の背後にいる19世紀の同化ユダヤ人たちとの経験は、まるでひとつの夢に帰してしまうように思われる。

ポスター発表 (14:30～17:30)

G 会場

504 号室:

身体のリズムとは何か ―世紀転換期における体操とダンス

熊谷 哲哉

リズムとは何か、そして何が人間を動かしているのか。この問いに何らかの回答を提示することは、世紀転換期の身体文化全体における大きな課題であったといえよう。

この分野においては、生改革運動やアスコナの芸術家たちについての研究

が、すでに多く残されている。しかしながら、他のジャンルにおける身体への言及、たとえばオカルティズムや精神分析における無意識的な身体の動きや、身体訓練としての体操との連続性・親和性についてはあまり言及されることがなかったといえる。

シャルコーのヒステリー研究に影響を受けた、シュレンク-ノッチングは催眠状態の素人女性を舞台に上がらせ、ダンスの上演を行った。分節化されえない無意識下の身振りは多くの芸術家を驚愕させた。ダルクローズやボーデ、そしてシュタイナーらは身体のリズムを意識した体操を考案し、またラバンは従来の芸術に依存しない独立した芸術ジャンルとしてのモダンダンスの本質を語ろうとした。言語化しえないものとしての身体のリズムをめぐる言説は、従来文化の範疇に入らなかったさまざまな雑音を取り込んで、新たな身体観を構築し、また新たな美の形式を生み出した。

本発表では、この時代における身体をめぐる言説から、とりわけ体操およびダンスにおいて、リズムという概念についての考察とその言語化がどのように行われていたのか、そして人々が身体の上に何を見たのかを探る。

505 号室:

現存する8つの「学生牢」・写真パネル展示

長友 雅美

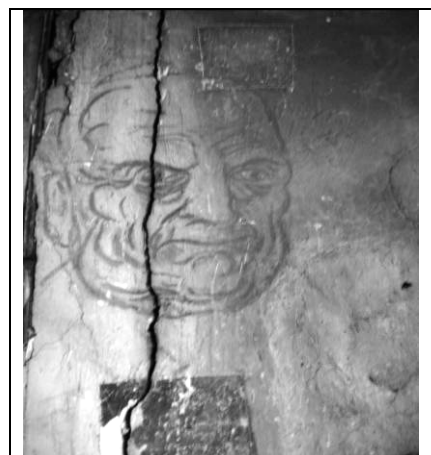
ドイツの大学には、その昔「カルツァー Karzer」と呼ばれる「学生牢(学生収監室)」があった。しかし今も残っているのはテュービンゲン、エアランゲン、ハイデルベルク、マールブルク、ゲッティンゲン、イエーナ、フライベルク、グライフスヴァルトの各大学である。このうちテュービンゲン、ハイデルベルク、ゲッティンゲン、グライフスヴァルトの「カルツァー」は見学可能だが、その他は許可を得る必要がある。

入牢体験者にはドイツ文化史上著名な人物が数多くいる。イエーナ大学の「カルツァー」には幼児教育の創始者フレーベル(Friedrich Fröbel:1782－1852)とミュンヘン大学独文学教授として活躍したマースマン(Hans F.Maßmann:1797－1874)、エアランゲン大学には作家シューバルト(Christian F. Daniel Schubart: 1739－1791)、ゲッティンゲン大学にはビスマルク(Leopold Otto v.Bismarck:1815－1898)、ハレ大学には作家ラウベ(Heinrich R.C.Laube 1806－1884)、ハイデルベルク大学には、サン・マルテ(San-Marte)の偽名で「パルツイヴァル *Parzival*」の翻訳を行ったシュルツ(Albert Schulz:1802－1893)、またボン大学には社会思想家マルクス(Karl H.Marx: 1818－1883)などである。さ

らに、今は擁護施設とその研究教育機関となっている、かつてのアルトドルフ大学【1580年開校、1809年廃校】の「カルツァー」には、シラーの戯曲『ヴァレンシュタイン』で有名なヴァレンシュタイン(Albrecht von Wallenstein:1583-1634)が収監されたと云われており、マールブルク大学には、すんでのところ収監を免れたロシア人留学生ロモノソフ(Michail W.Lomonosov 1711-1765)【後にモスクワ大学の創立者として名を残した】の逸話が伝わっている。

残念ながらこれら著名な人々が収監された「カルツァー」のほとんどが、時の流れのなかで失われてしまっている。因みに、『ハルツ紀行』の中でハイネが記した「カルツァー」が現存のものであるかどうかは定かではない。また「収監された」証となる公式文書が残ってはいるものの、ビスマルクが2度も入牢した「カルツァー」は現存するものとは無縁であり、ボン大学の「コブレンツ門」の屋根裏にあった「カルツァー」に、若きマルクスが収監されたかどうかは定かではない。

目下マールブルク大学の「カルツァー」は修復作業中で、ゲッティンゲン大学でも(賛否両論はあるものの)修復作業が開始されようとしている。物議をかもし出したと云われる、ディステリ(Martin Disteli:1802-1844)が描いた『ゲーテの似顔絵』を有するのがイエーナ大学の「カルツァー」である。だがこの通称「ディステリ・カルツァー」の保存状態は危機的状況で、マールブルク大学やゲッティンゲン大学と同様、早急な保守修復作業が必要であろう。



イエーナ大学の「学生牢・カルツァー」に残るディステリが描いた『ゲーテの似顔絵』

今回の写真パネル展示では、過去5年間にわたり、現存する8大学の「学生牢・カルツァー」を自ら訪問・撮影した写真を中心に、知られざるドイツ文化の一端を紹介することを目的とする。

506号室:

虐げられた民族の英雄への賛歌 —ローベルト・シューマン

によるショパン批評「作品II」再考—

佐藤 英

1831年、ローベルト・シューマンは『一般音楽新聞』において、最初の音楽批評記事「作品II」(ショパンの『ドン・ジョヴァンニ』の〈お手をどうぞ〉による変奏曲)作品2の批評)を發表する。この記事は、空想性ある会話文体に執筆者の熱意が滲み出したために強い説得力を持ち、ショパン評価の気運を生むことにな

った。しかしシューマンがこの記事を執筆した理由は、そもそも何なのか。作品に対するシューマンの熱狂という、これまで言われ続けてきた「解説」以外にも、その理由はある —これが私の仮説である。

1836年に執筆された、シューマンによるショパンのピアノ協奏曲批評は、この仮説を裏付ける重要な証拠である。この批評においてシューマンは、ショパンを世間に知らしめた理由を、ポーランド出身という彼のナショナリティーと、その国民性への強い共感を掻き立てる彼の音楽に求めた。ほかならぬシューマンがショパン評価の先駆者であったことを思うと、このくだりは、シューマンその人の理解の仕方を物語っているのではあるまいか。

とはいえ、批評記事「作品Ⅱ」からこのことを読み取ることは、不可能である。それゆえ、日記の記述やシューマンが活動の場としたライプツィヒの都市事情（例えばワーグナーが『わが生涯』に記しているポーランド難民の問題）などの状況証拠から、従来試みられなかった批評記事「作品Ⅱ」の生々しさを描き出してみたい。その際必要に応じて、1830年代初頭にドイツ語圏で執筆されたシューマン以外のショパン批評も紹介したい。

折しも今年2006年は、シューマンの没後150年にあたる。多数の資料をもとに参加者と議論を交わすことにより、彼の音楽批評を新たに読み直す方策を模索できればと考えている。

第 2 日 6 月 4 日 (日)

シンポジウム II (10:00~13:00)

B 会場

ドイツ語標準語の諸相 –その歴史と現状–

Aspekte der deutschen Standardsprache: Entwicklung und Gebrauch

司会: Angelika Werner, Manabu Watanabe

Die neuhochdeutsche Standardsprache ist im Hinblick auf ihre Homogenität und Differenzierung in jüngster Zeit in der linguistischen Diskussion verstärkt Gegenstand der Betrachtung geworden (vgl. das Thema der IDS-Jahrestagung 2004 „Standardvariation“). Zwar verleiht der Begriff „Standardsprache“ den Eindruck eines klaren und einheitlichen Gegenstandes, aber es handelt sich tatsächlich um ein sehr vielschichtiges, komplexes Phänomen, das unter sehr unterschiedlichen Aspekten betrachtet werden kann. Dazu gehören u. a. die plurizentrische Natur der deutschen Sprache (dialektale Variation), Fragen der Grammatikschreibung im Spannungsfeld zwischen Schriftlichkeit und Mündlichkeit sowie die Schichten der Standardsprache in Abgrenzung zu Soziolekten.

Ein gebildeter Laie wird sich die Standardsprache als zuverlässiges Sprachmittel wünschen, auf deren verbindliche Normen zugegriffen werden kann (Schule, Verwaltung, Rechtsprechung etc.). Diesen Eindruck hinterlassen auch manche Grammatiken. Dass aber die Sprachbeschreibung einem normativen Wunschdenken entgegenkommen soll, darf jedoch nicht den Blick auf die tatsächlich vielfältigen Entwicklungen im Sprachgebrauch verstellen, die auch eine Standardsprache durchläuft und sie letztendlich formen. Es ist die Aufgabe des Linguisten dies angemessen zu erfassen und zu beschreiben.

Das Symposium soll durch seine Referate einige Aspekte der

neuhochdeutschen Standardsprache, die auf verschiedenen linguistischen Korpusuntersuchungen und Forschungen zum Sprachgebrauch beruhen, zu einer Diskussionsrunde zusammenführen. Die zugrundeliegenden Fragen sind hierbei, ob sich in der Entwicklung und beim Sprachgebrauch Tendenzen erkennen lassen, die bei der deskriptiven Beschreibung (Grammatik) dringend zu berücksichtigen sind. Auf diesem Weg der Annäherung aus unterschiedlichen linguistischen Blickwinkeln ist es vielleicht möglich, den Begriff der „Standardsprache“ besser zu erfassen.

Das erste Referat soll zunächst eine Einführung zur neuhochdeutschen Standardsprache und ihren linguistischen Fragestellungen geben. Daran anschließend sollen einige Thesen zur neuhochdeutschen Standardsprache im Bereich des Lexikons anhand von Korpusuntersuchungen formuliert werden (Gabriela SCHMIDT, Resümee siehe unten).

Das folgende Referat steht unter einem sprachhistorischen und syntaktischen Aspekt und zwar zu einer Kausativ-Konstruktion, die zu Goethes Zeit in der Standardsprache akzeptiert wurde, heute aber nicht mehr gebraucht wird (Susumu KURODA, Resümee siehe unten).

Das dritte Referat untersucht einen synchronen syntaktischen Aspekt im Bereich der Satzstellung. Hier soll die Varianz bei der Stellung der Satzglieder im Mittelfeld (Dativ, Akkusativ) untersucht werden (Itsuko TOKITA, Resümee siehe unten).

Das nächste Referat betrachtet einen interaktiv-pragmatischen Aspekt der Sprache, wobei der Sprachgebrauch auf einer Skala zwischen schriftlichem und mündlichem Ausdruck untersucht und auf die Spracherlernung bezogen wird (Angelika WERNER, Resümee siehe unten).

Daran schließt sich das Referat mit einem soziolinguistischen Aspekt an, das die Vielschichtigkeit und den Variationsreichtum (der medial geprägten) Umgangssprache gegenüber der Standardsprache untersucht (Manabu WATANABE, Resümee siehe unten).

Das abschließende Referat unter einem psycho-linguistischen Aspekt soll die Frage untersuchen, wie Sprecher der deutschen Sprache zwischen verschiedenen Optionen beim Formulieren tatsächlich entscheiden (Frank MIELKE, Resümee siehe unten).

Literatur:

Berthele, Raphael (2003): „Standardvariation - Wie viel Variation verträgt

die deutsche Standardsprache? Bericht von der 40. Jahrestagung des IDS.“ In: *Deutsche Sprache. Zeitschrift für Theorie, Praxis, Dokumentation.* 31, S.379-382.

Eichinger, Ludwig M. / Kallmeyer, Werner (Hrsgg.; 2005): *Standardvariation. Wie viel Variation verträgt die deutsche Sprache?* Jahrbuch 2004 des Instituts für deutsche Sprache. VIII/381 S. - Berlin / New York: de Gruyter.

1. Entwicklungstendenzen der neuhochdeutschen Standardsprache am Beispiel des Lexikons M. Gabriela Schmidt

Zunächst sollen einige Entwicklungen der neuhochdeutschen Standardsprache u. a. im Bereich des Lexikons, der Wortbildung und des Sprachgebrauchs aufgezeigt werden. Diese sind zwar sehr augenfällig und werden sicherlich einigen Sprachpuristen die Haare zu Berge stehen lassen, sie machen m. E. jedoch nur einen sehr kleinen Teil innerhalb des deutschen sprachlichen Lexikons und seiner Redemittel aus. Das Vergessen von sprachlichen Ausdrücken ist demgegenüber sehr viel schleichender. Sowohl das Aufnehmen wie auch das Abgeben von sprachlichen Ausdrücken zeigen eher, dass eine Sprache „gesund“ und „kräftig“ ist und grammatisch-sprachliche Mittel zur Verfügung hat, um auf neue Bedingungen und Bedürfnisse einzugehen. Die neuhochdeutsche Standardsprache zeigt damit Kontinuität und Flexibilität. Dies gilt auch für grammatische Erscheinungen, die mit dem Lexikon verbunden sind, wie z. B. Pluralbildungen, deren Unsicherheiten sich auch als dynamischer Anpassungs- bzw. Umschichtungsprozess und nicht notwendig als Zeichen des „Sprachverfalls“ interpretieren lassen.

Fast unscheinbar existiert neben diesen augenfälligen Neuerungen und den stilvollen Niveaus der Schriftsprache ein sprechsprachlicher Alltagswortschatz, der Kennzeichen einer deutschen Standardsprache, wie Überregionalität, Verbindlichkeit und Stabilität trägt, ohne eine besondere Beachtung bei linguistischen Untersuchungen zu finden. Dieser „sprechsprachliche Alltagsstandard“ garantiert unmerklich einen reibungslosen Ablauf unseres tagtäglichen Lebens und ist uns so nah, dass wir durch ihn hindurch blicken. Dies soll hier an einigen Beispielen erläutert

werden: „*Kommst du zurecht*“?. Das Fehlen dieser selbstverständlichen Ausdrücke des Alltagsstandards in den DaF-Lehrbüchern ist m. E. mit ein Grund für die mangelnde sprechsprachliche Alltagskompetenz.

Literatur:

Barbour Stephen and Patrick Stevenson (1998): *Variation im Deutschen. Soziolinguistische Perspektiven*. Berlin/ New York.

2. Der Stellenwert des „Dativ-Causees“ im Deutschen

Susumu Kuroda

Syntaktische Konstruktionen, die heute in der deutschen Standardsprache nicht akzeptiert werden, stellt man auch in den Texten fest, die aus einer nicht sehr weit zurückliegenden Zeit stammen.

Ein solches Beispiel stellt der Typ der Kausativkonstruktion mit *lassen* dar, der dasjenige Satzglied (,Causee') im Dativ kodiert, welches gegenüber dem Objekt des Infinitivs als Agens, gegenüber dem Hilfsverb als Patiens fungiert (z. B. *Ich ließ ihm das Haus sehen*). Dieser Konstruktionstyp war noch in den standarddeutschen Texten aus dem 18. und 19. Jahrhundert relativ geläufig. Im heutigen Standarddeutschen gilt jedoch die Kausativkonstruktion mit *lassen* ausschließlich als eine *accusativum cum infinitivo*-Konstruktion, und so wird der Konstruktionstyp mit einem Dativ-Causee nicht akzeptiert.

In diesem Beitrag wird zunächst dieser Typ der Kausativkonstruktion mit *lassen* einer Überlegung unterzogen. Ausgehend von Ergebnissen aus einer Korpusuntersuchung soll gezeigt werden, in welchen Umgebungen dieser Konstruktionstyp auftritt. Auch sein Stellenwert im deutschen Grammatiksystem wird anschließend aus einer sprachtypologischen Perspektive betrachtet. Eine Rekonstruktion der Entstehungsgeschichte dieses Konstruktionstyps soll ebenfalls versucht werden.

Abschließend soll ebenfalls auf die Diskussion eingegangen werden, die Grammatiker unterschiedlicher Generationen zu diesem Konstruktionstyp führten. Es soll gezeigt werden, dass unterschiedliche Haltungen gegenüber den Sprachvarietäten unterschiedliche Einschätzungen dieses Konstruktionstyps veranlassten.

3. Die Satzstellung im Mittelfeld im Hinblick auf ihre Varianz **Itsuko Tokita**

In diesem Vortrag handelt es sich um das syntaktische und semantische Verhalten des unbelebten Dativs, besonders um seine Wortstellung im Mittelfeld der transitiven Sätze.

In vielen Grammatiken wird zwar die “normale” Reihenfolge der Dativ- und Akkusativ-NPs erwähnt, dass der Dativ also vor dem Akkusativ steht. In Bezug auf den unbelebten Dativ wird bei Verben in einer bestimmten Semantik jedoch die Abfolge Akkusativ – Dativ als normal betrachtet:

(1) *Er setzte das Kind der Gefahr aus.* Für diese Konstruktion werden in den bisherigen Forschungen nur einige Verben genannt und deswegen bleibt das Gesamtbild des unbelebten Dativs noch unscharf.

Hier versuche ich mithilfe eines Korpus die Wortstellung des unbelebten Dativs bei verschiedenen Verben zu analysieren. Damit wird versucht, folgendes zu zeigen: 1) statistisch gesehen, gibt es einerseits Verben des Typs A, bei denen die Wortstellung Dativ – Akkusativ bevorzugt wird, andererseits Verben des Typs B, bei denen vorwiegend der Akkusativ vor dem Dativ steht. Zwischen Verbgruppe A und B werden auch Unterschiede in der Satzsemantik beobachtet. 2) Bei den beiden Gruppen haben auch die Morphologie und die Informationsstruktur der NPs gegenseitige Neigungen. 3) Die Elemente bei den A - Verben verhalten sich ähnlich wie die bei den Verben mit belebtem Dativ und die Elemente bei den B - Verben wie die bei den Verben mit direktonaler Präpositionalphrase.

Literatur:

Wegener, Heide (1991): *Der Dativ - ein struktureller Kasus?*

時田伊津子 (2005): 「他動詞文の無生物3格と中域語順(1)」

4. Standard unter medialem und konzeptuellem Aspekt: **Mündliche und schriftliche Sprache** **Angelika Werner**

Als ein Kriterium zur Unterscheidung der Varianten der deutschen Standardsprache kann man das Medium, in dem die Sprache übermittelt wird, ansehen: man erhält dann eine Variante gesprochene Sprache (gesprochen mit jemandem über etwas) und eine Variante geschriebene Sprache (geschrieben auf etwas über etwas). Ich möchte die wesentlichen Unterschiede, die durch

das Medium entstehen, als da wären: Verdauerung durch schriftliche Fixierung, zeitliche, räumliche und personelle Gleichzeitigkeit bei gesprochenen Sprache usw. und deren pragmatische Implikationen und Möglichkeiten aufzeigen. Ausgehend von einem handlungstheoretischen Ansatz wird geschriebene oder gesprochene Sprache dabei als ein Handlungstyp des interaktiven Handelns verstanden.

Außer der medialen Einteilung möchte ich auf die konzeptuelle Einteilung der Varianten eingehen.

Ich möchte bei dieser Unterscheidung zeigen, dass es sinnvoller ist, keine strenge Trennung der beiden Varianten, sondern ein Kontinuum für feinere Kategorien von Varianten anzunehmen, die durch bestimmte Faktoren festgelegt werden und sich dann je an einer Stelle des Kontinuums befinden. Auf diesem Kontinuum sind dann zwischen den Extrempunkten formale geschriebene Texte und persönliches Gespräch zu zweit, literarische Romane genau so gut einzuordnen wie etwa E-Mails, Briefe oder Theateraufführungen.

Als praktische Folge meiner Überlegungen möchte ich noch einige Konsequenzen für die Vermittlung im Fremdsprachenunterricht ansprechen und ein Beispiel hierfür erläutern.

Literatur:

Ehlich, Konrad (1994): „Funktion und Struktur schriftlicher Kommunikation.“ In: Günther, Hartmut/ Ludwig, Otto u.a. (Hgg.): *Schrift und Schriftlichkeit* HSK 10.1. Berlin/ New York. 18-41.

Kasper, Gabriele & Rose, Kenneth R. (2003): *Pragmatic development in a second language*. Blackwell.

Schlobinski, Peter (Hrg.) (1997): *Syntax des gesprochenen Deutsch*. Opladen.

5. Verhalten der (medial geprägten) Umgangssprache gegenüber der Standardsprache **Manabu Watanabe**

Das Referat zielt auf die Frage, wie sich Gruppensprachen zur Standardsprache verhalten, hier am Beispiel der Jugendsprache bzw. Mediensprache (z. B. Handysprache, Weblogsprache). Es ist schwer, zwischen Jugendsprache und Umgangssprache (Alltagssprache) im Sinne einer

Definition zu unterscheiden. Denn bis auf einige Lexeme, Wendungen und intonatorische Eigenschaften lassen sich als generationssoziolektal vorfindbar geglaubte jugendsprachliche Charakteristika in den meisten Fällen auch in der Umgangssprache wiederfinden. Hingegen scheint in der fachwissenschaftlichen Terminologiegeschichte Umgangssprache zwischen Dialekt und Standardsprache (Hochsprache) verortet zu werden. Umgangssprache stellt keine statistische Entität dar, sondern erscheint bekanntermaßen je nach Medien, Kommunikationssituationen und Sprecher-Hörer-Verhältnis (z. B. Vertrautheit zum Adressaten) so verschiedenartig, dass man sogar von einer Destandardisierung der (deutschen) Sprache sprechen dürfte. Aus soziolinguistischer bzw. varietätenlinguistischer Perspektive könnte nämlich versucht werden zu zeigen, wie vielschichtig und variationsreich (die – gewollt oder ungewollt – medial geprägte) Umgangssprache gegenüber der Standardsprache überhaupt ist, anders formuliert, wie viele verschiedene Regelhaftigkeiten/Substandards mit ihren eigenen Registern bzw. ihrem eigenen Sprech-/Schreibstil mittlerweile auf dem besten Weg sind, sich auszubilden.

Ausgangshypothesen bei der Fragestellung lauten: 1.) Angesichts des schnellen Wandels der medialtechnologischen Ausrüstungen, die auf die sprachlichen Realisierungsformen Einfluss ausüben sollten, ist noch abzuwarten, ob in den „neuen Medien“ wirklich Standardisierung stattgefunden hat oder ob das vielmehr nur fehlgeschlagene Überreste einer Standardisierung darstellen. 2.) Gewisse Sprachphänomene sind ausschließlich für einen bestimmten medialen Kanal (für eine bestimmte mediale Kommunikationsform) typisch und üben keinen tragenden Einfluss auf die allgemein umgangssprachliche (Sprach)Wirklichkeit aus.

Literatur:

Heinrich Löffler (2005): *Germanistische Soziolinguistik*. 3. Aufl. Berlin.

Manabu Watanabe (im Druck): „Varietätenlinguistische und historische Aspekte der Erforschung der Jugend- und Umgangssprache.“ In: Franz Hundsnurscher (Hg.): *Festschrift für Prof. Dr. Shoko Kishitani*. Göttingen.

6. Wie man zwischen verschiedenen Formulierungsoptionen auswählt

Frank Mielke

Für jede nicht stereotype Äußerungsabsicht gibt es prima facie eine große, wenn nicht unendliche Anzahl von theoretischen Möglichkeiten, diese in Worte zu fassen. Im Rahmen empirischer Studien wurde für einige Äußerungsintentionen die Bandbreite der tatsächlich zum Einsatz kommenden Formulierungen ermittelt. Es stellte sich heraus, dass die Formulierungsoptionen, die den Versuchspersonen zur Verfügung standen, nicht alle in der gleichen Häufigkeit gewählt wurden, vielmehr gibt es einige prominente Strukturen, die wesentlich häufiger zur Anwendung kamen als andere. Dies zeigt sich sowohl auf der Ebene der Gesamtäußerung als auch auf der Ebene der Äußerungsteile (z. B. Wortwahl).

Gibt es etwa in einem Äußerungszusammenhang drei oder mehr Formulierungsoptionen, dann lassen sich in der Regel zwei verschiedene Häufigkeitsmuster beobachten. Entweder wird eine Option mit über 90 % nahezu ausschließlich gewählt und die übrigen Optionen treten lediglich als bloße Ausnahmen in Erscheinung oder aber die Häufigkeitswerte lassen sich in eine Rangreihe bringen und liegen im Idealfall auf einer Kurve, die sich am sinnvollsten durch eine Exponentialfunktion beschreiben lässt. Was diese Funktion angeht, so wird die folgende Hypothese vertreten:

Die absolute Häufigkeit der in einer Rangreihe i -ten Formulierungsoption berechnet sich auf der Basis einer Menge von n Äußerungen nach der folgenden Formel: $n (1/2)^i$

Literatur:

Mielke, Frank (2003): *Sprachproduktion im Kräftefeld gewichteter Formulierungsoptionen. Zur Variabilität und Uniformität sprachlicher Äußerungsmerkmale*. Frankfurt/Main.

シンポジウム III (10:00~13:00)

A 会場

旅行文学と移民文学 – 文化人類学の視点から

Reise- und Migrationsliteratur. Kulturanthropologische Perspektiven

司会: Keiko Hamazaki, Yumiko Washinosu

Seit der kulturwissenschaftlichen bzw. kulturanthropologischen Wende in den Geistes- und Literaturwissenschaften hat in neueren Arbeiten das lange vernachlässigte Forschungsgebiet der Reiseliteratur bzw. der Reiseberichte stärkere Beachtung gefunden. Und dies vollkommen zu Recht, da die Reiseliteratur – wie wohl keine andere Textgattung – literarische, soziale, kulturelle und anthropologische Fragestellungen aufeinander bezieht.

Konzentrierten sich die älteren Forschungen zur Reiseliteratur auf die historische Erforschung des Reisens, auf die verschiedenen Reisemodi (z. B. Pilgerreise, Bäderreise) und auf die Realität des bereisten Landes, so sind neuere Forschungen, vor allem unter dem Eindruck von cultural studies und postcolonial studies, in ein breites Themenspektrum aufgefächert, in dem u. a. Bereiche wie Alteritätserfahrungen, Raumaneignungsformen, Wahrnehmungs- und Darstellungsstrategien (z. B. durch Topoi), Identitätskonstruktionen, Rituale und Fragen des Kulturwandels angesprochen werden.

Grundsätzlich läßt sich in diesen neueren Untersuchungen eine Konzentration auf die Darstellungs- und Repräsentationsformen der Reiseliteratur – also auf ihre ‚Textualität‘ – erkennen, der eine konstruktive Kraft, etwa beim Entwurf von fremden Menschen und fernen, exotischen Welten, zugesprochen wird.

Unter literatur- und kulturanthropologischen Gesichtspunkten erscheinen aus diesem Themenspektrum zwei Bereiche besonders relevant, nämlich a) der Bereich der Alterität und b) der Bereich der Wahrnehmungs- und Darstellungsstrategien.

Zu a) Der Bezug zu Anderen/zum Anderen, d.h. die Alteritätsfrage, wird in der Reiseliteratur gleichsam paradigmatisch – und zwar in doppelter Weise –

gestellt, nämlich einmal, zumeist explizit, im Bezug auf die bereiste ‚fremde‘ Gegend oder Kultur, die zumeist als Stoff und Thema in ihr erscheint; zum anderen aber auch, zumeist implizit, insoweit die bereiste ‚Fremde‘ oft einen Zugang zur ‚eigenen‘ Alterität eröffnet, die integriert, bearbeitet oder ausgeschlossen werden kann. ‚Reise‘ in diesem anthropologischen Sinn ist nicht zuletzt auch als ‚Lebensreise‘ zu verstehen, werden doch von der Reiseliteratur die beiden ‚unzugänglichen Kardinalpunkte menschlicher Existenz: Anfang und Ende massiv besetzt und bebildet‘. Inszenierungen des Anfangs und Endes sind deshalb genuine Anliegen der Reiseliteratur, auf die drei Beiträge des Symposiums eingehen: Ivanovic stellt ‚Letzte Kontakte‘, Reisen in die Katastrophe‘ vor, deren Verarbeitungen als ‚ästhetische Konstruktionen‘ anzusehen sind; als Pendant dazu thematisieren Dürbeck und Hamazaki ‚Erste Kontakte‘– und dies an ganz unterschiedlichen Texten, die sich erstaunlicherweise direkt aufeinander beziehen lassen: Dürbeck am Beispiel von Weltreisebeschreibungen des 18./19. Jahrhunderts und Hamazaki am Beispiel der gegenwärtigen ‚Migrantenliteratur‘.

Zu b) In Hinsicht auf Wahrnehmungs- und Darstellungsstrategien untersuchen zwei Beiträge des Symposiums Topoi und ihre konstruktiv-strukturierende Kraft: Yoshida thematisiert ‚Berichtstopoi‘ und ihre standardisierende Funktion in der Reiseliteratur des 18. Jahrhunderts; Pekar untersucht den Inversions-Topos in einigen westlichen Texten, die Japan so als das ‚ganz Andere‘ entwerfen.

1. Begrüßungszeremonien in der deutschen Reiseliteratur des zweiten Entdeckungszeitalters **Gabriele Dürbeck**

Der Vortrag wird das noch wenig erforschte Thema der Begrüßungszeremonien zwischen europäischen und außereuropäischen Kulturen im zweiten Entdeckungszeitalter behandeln. Im Vordergrund soll dabei deren literarische Darstellung und Bewertung stehen. Textgrundlage sind deutsche Weltreisebeschreibungen von G. Forster (1777), Krusenstern (1810-12), Kotzebue (1821) und Chamisso (1821; 1836). Darin sind unterschiedlichste Begrüßungsszenen zwischen Europäern und Bewohnern südpazifischer Inseln, der Aleuten, Japans und Chinas dargestellt, die einen Vergleich geradezu herausfordern. Vor allem drei Aspekte möchte ich herausstellen: 1. Typologisierung der

Begrüßungszeremonien nach ihren notwendigen und akzidentiellen Bestandteilen (Tausch von Grußgesten, Geschenken, Namen und materiellen Gütern, Einladung zum Essen, politisch-wirtschaftliche Verträge, Kanonensalven, Musik etc.). 2. Kulturelle Unterschiede der Begrüßungszeremonien: Welche wechselseitigen Erwartungen bestehen zwischen den beiden Kulturen? Werden diese erfüllt oder nicht? Inwiefern passen sich die Europäer den kulturellen Erwartungen und Konventionen des jeweiligen außereuropäischen Landes an? Welche axiologische Dimension (Todorov) wird der interkulturellen Begegnung zugeschrieben und wird diese im Text national bzw. ethnisch gedeutet? 3. Folgt die Begrüßung bei Wiederbegegnungen derselben Partner denselben Regeln, und wenn nicht, welche Bestandteile der Zeremonie werden verändert? Hierbei ist auch auf den Spezialfall von Captain Cooks Tod auf Hawaii einzugehen.

2. Beschreibung des „First Contacts“ in der deutschsprachigen „Migrantenliteratur“

Keiko Hamazaki

Zu den Spezifika der so genannten „Migrantenliteratur“ gehört die Beschreibung des Gastlands vom Standpunkt Außenstehender her. Vor allem die Beschreibung der „ersten Begegnung“ der Einreisenden mit Deutschland wird das „andere“ Bild von Deutschland vor Augen führen. In dem Referat wird die Frage behandelt, ob dabei überhaupt von einem Parallelbeispiel zur „Reiseliteratur“ gesprochen werden kann. Heringezogen werden die „Writing Culture“-Diskussionen der Kulturanthropologie über die Problematik der Textualisierung der „Anderen“.

In der Reiseliteratur, die die „Fremde“ aus dem bestimmten Erwartungshorizont des beobachtenden Europäers nur teilweise wahrnimmt, wird eine Grenze zwischen dem schreibenden Ich und dem dargestellten Anderen gezogen. In der Migrantenliteratur adressiert das schreibende Ich dagegen seine Fremderfahrung nicht an seine Heimat oder muttersprachliche Gemeinschaft, sondern an die Gastgeber. Anhand einiger Textbeispiele von jüngeren türkischstämmigen Autoren wird die Frage gestellt, wieweit „verfremdete“ Bilder Deutschlands durch den Erwartungshorizont der deutschsprachigen Leser geprägt werden, für die ja die Migrantenautoren ihre Texte schreiben.

3. Reiseführer des 18. Jahrhunderts. Eine Analyse der Funktion der Berichtstopoi in der Reiseliteratur

Kotaro Yoshida

In seinem Universal-Lexicon (1732-1754) definiert Johann Heinrich Zedler den Reisebericht als ein Medium, das die Reiseerfahrungen widerspiegele. Es werde darüber berichtet, wann und wie Reisende einen Ort erreichen und welche Merkwürdigkeiten ihnen begegnen. Man habe, so fügt Zedler im Artikel hinzu, den wahren von dem fingierten Reisebericht zu unterscheiden. Sein Artikel reflektiert eine kulturelle Situation im 18. Jahrhundert, in welcher der Buchmarkt für Reiseliteratur, die unter den Gattungen wissenschaftlicher Reisebericht, persönliches Reisetagebuch oder Reisebrief und fiktive Reiseliteratur verallgemeinert wurde, expandierte. Zedler extrahiert in diesem Sinne einen wirklichen wissenschaftlichen Reisebericht aus den sich verbreiteten Reiseliteraturen.

Daraus lässt sich folgern, dass es in der Reiseliteratur gemeinsame Topoi als die Bedingung, unter der „ein Reisemäßiges“ auf dem Text literarisch vorgestellt werden kann, entstand. Um diese Berichtstopoi erläuternd aufzuzeigen, betrachtet mein Vortrag einige im 18. Jahrhundert publizierte Reiseführer. In diesen Reiseführern werden die Reiseberichtstopoi genannt, mit Hilfe derer ein Reisender die Berichtsdatei effizient ausfüllen und nach der Reise seinen eigenen Reisebericht verfassen konnte. Gleichzeitig ermittle ich durch die Interpretation damaliger Reiseliteraturen die Funktion dieser Topoi, die Erfahrung und die Beobachtung des Reisenden zu textualisieren und auf andere Personen zu übertragen.

4. Warum in Japan alles anders ist.

**Zur Kulturanthropologischen Dimension von Topoi in
Deutschsprachigen Japan- Beschreibungen Thomas Pekar**

Wenn es eine Konstante in der westlichen Literatur über Japan gibt, dann ist es die, daß Japan andersartig, gegensätzlich, fremd, ja am fremdesten, kurzum ‚antipodisch‘ sei. Diesen Topos der Andersartigkeit und Gegensätzlichkeit, der Inversion, will ich für die Zeit nach der Öffnung Japans (1853), anhand von einigen Beispielen belegen. Diese Denkfigur der Inversion ist jedoch keineswegs japan-spezifisch: Sie ist von Anfang an, da, z. B. in einer der

ersten ‚Reisebeschreibungen‘ der abendländischen Kultur überhaupt, in Herodots (484 v. Chr. – 425 v. Chr.) Historien. Was dort der Grieche Herodot über die Ägypter schrieb, erinnert an die ‚Gegensatzlisten‘, die europäische Reisende seit dem Traktat Kulturgegensätze in Europa und Japan (1585) des portugiesischen Missionsberichterstatter Luis Frois immer wieder über Japan und die Japaner erstellen. Ausgehend von diesem Faktum der also weitgehend Zeit- und Kulturunabhängigkeit des topographischen Inversions-Topos will ich ihn aus kulturanthropologischer Perspektive betrachten.

Einen möglichen Zugang zu dieser kulturanthropologischen Dimension eröffnet die sozialpsychologische Distinktivitätstheorie, die davon spricht, daß die Repräsentation einer Fremd- oder Andersheit für die Definition des eigenen Selbst unumgänglich ist. Auf kultureller Ebene entspräche diese anthropologische Konstante der Schaffung eines ‚anderen Raumes‘, den ich – im imaginär-isotopischen Sinn – ‚Orient‘ nennen möchte.

5. Last contact: Reisen in die Katastrophe.

Zum Erkenntniswert medialer Verschiebungen in

Untergangsszenarien

Christine Ivanović

Eine Reise mit katastrophalem Ausgang stellt gewissermaßen den Anti-Typus der Reiseliteratur dar. Die Katastrophe überwältigt die Subjektivität des Reisenden, welche ersetzt werden muß durch die ‚objektivierende‘ Perspektive von Ersatz-Erzählern, Herausgebern oder technisch gesteuerten Medien der Aufzeichnung. Die Reise in die Katastrophe wird deshalb zur produktiven Herausforderung an das Genre Reiseliteratur, weil die Verschiebung der Darstellungsform den Blick von der ‚Landnahme‘ weglenkt und statt dessen auf das Unheimliche im Reisen selbst fokussiert.

Anhand zweier fiktiver Reiseberichte derselben Epoche – A.S.Puškins ‚Stacionnyj smotritel‘ (1831) und E.A.Poes ‚Narrative of Arthur Gordon Pym from Nantucket‘ (1838) – soll das Problem aus zwei unterschiedlichen Referenzsystemen heraus skizziert werden. In beiden Fällen ermöglicht erst die genaue Analyse der erzähltechnischen Konstruktion eine Bestimmung des ästhetischen Ortes und der Funktion des jeweiligen Untergangsszenarios. Dem wird ein zeitgenössisches Hörspiel gegenübergestellt (Ammer/ Einheit: ‚Crashing Aeroplanes‘, WDR 2001), das eine neue Stufe der Reiseliteratur in

einem Zeitalter repräsentiert, wo die mediale Information die Möglichkeit unmittelbarer Erfahrung ebenso konsequent wie nachhaltig unterläuft. Während Poe wie Puškin darauf zielen, in der Fiktionalisierung die Möglichkeiten und Grenzen, die Abgründe wie das erkenntniskritische Potential von textualisierten Reiseerfahrungen aufzudecken, versucht das Hörspiel das reale Geschehen in seinem Wahrheitsgehalt der virtuellen Erscheinungsform seiner Vermittlung erst wieder abzurufen. Auch dies gelingt nur über die ästhetische Konstruktion.

口頭発表:文学3 (10:00~12:15)

C 会場

司会:青木 敦子, 山本 洋一

1. ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』における

「友情」の主題

浅井 英樹

ゲーテが生きた時代は、市民社会の発展とともに、自由な個人間の対等な「友情」が称揚される一方で、フランス革命に象徴されるように、共同体形成のための紐帯として「友情／友愛」が政治的な文脈で語られた時代であった。ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』でも、「友情」の私的側面と公的側面のせめぎ合いが批判的に文学的テーマとして扱われている。前半の演劇の世界でヴィルヘルムがとなえる「友情」の礼賛と、劇団の「共和制」化の理想はイロニー化され、後半の「塔の結社」の世界では、「友情」の社会化の過程が描かれている。その一方で、ゲーテは、豎琴弾きやミニヨンに見られるように、「友情」がその実存にかかわる登場人物を造形することで、社会化・政治化される「友情」に対する一つのアンチテーゼを提出している。ゲーテ時代の「友情」についての概論的研究、当時の文学サークルの研究などの文化史的研究、ゲーテ自身の交友に関する研究に比べ、ゲーテの具体的な作品における「友情」についての研究は少なく、『修業時代』の研究史においても、このテーマは副次的テーマとして軽視されてきた。本発表では、『修業時代』における「友情」をめぐるディスコースと、主人公が会うさまざまな友人たちとの関係を、当時の時代背景やゲーテ自身の友情観と関連づけながら分析することで、この小説における「友情」の主題の機能を明らかにし、ゲーテにおける「友情」の意味を考察する

手がかりとしたい。

2. シラーの系譜学的思想

本田 博之

歴史家としてのシラーの評価は、H・ホワイトなどによる歴史学の言語論的転換と共に訪れた。その動向を受け、1990年代半ば以来、シラーの歴史的著作の意味が見直されてきている。最近の研究成果としては、2002年のプリューファー『歴史の形成』が挙げられる。歴史と教育の関係は1800年頃の歴史思想の重要なテーマであり、美学思想において歴史哲学をも展開していたシラーが近代の歴史学の形成において重要な役割を果たしたということであるが、このプリューファーにおいて興味深いのは、人間が歴史というメディアにおいて自身を人間へと形成し物語するという観点である。他方、「文学的物語」と「歴史記述」との境界の問題が、たとえば2005年のルゼルケの著作にも見られるように、たびたび指摘されているが、それはシラーの方法が単なる歴史記述ではなく、系譜学的な記述によるからではないだろうか。系譜学もまた、文学的テキストを拠り所とし得る一つの方法である。語源的にみれば系譜学は、「起源についての話」という意味であるが、単なる因果関係の歴史的な記述ではないのが系譜学的方法であり、事象の背後にある表面的には捉えられないものをその根底から掘り起こすような歴史の形成を問題にする際には、特に有効な手段であると考えられる。本発表では、まずは物語的著作からシラーの系譜学的思想を浮かび上がらせることを目標とする。それができれば、後期シラーにとっての系譜学的思想の意義が確認されるはずである。

3. Die Welt als Wille und Vorhang: Kleists dramatischer

Stil und Fichtes „Die Bestimmung des Menschen“

Michael Mandelartz

Ernst Cassirer hat bereits 1919 darauf hingewiesen, daß Kleists sogenannte „Kantkrise“ wahrscheinlich durch Fichtes *Die Bestimmung des Menschen* ausgelöst wurde. Sein Vorschlag wurde kaum ernsthaft geprüft, doch läßt sich eine ganze Reihe zentraler Fragestellungen in Kleists Schriften aus Fichtes Werk herleiten, etwa die Multiplizität des Ich (*Amphitryon*), der Umschlag von Gut in Böse (*Kohlhaas*), die Auffassung der Ehe (*Der Zerbrochne Krug*), der *Lebensplan* usw. Der Vortrag konzentriert sich auf den Gegensatz von empirischem und transzendentelem Ich.

Bei Kant entsteht die empirische Welt in Anwendung der Spontaneität des Ichs auf das Gegebene. Fichte eliminiert jedoch das Gegebene. Stattdessen wird das Ich selbst in transzendentes und empirisches Ich aufgespalten. Das *transzendente* Ich setzt spontan die Welt, durch die es als *empirisches* Ich *determiniert* wird. Kleist entwickelt daraus ein vierschichtiges Modell: 1) Das Tier reagiert fraglos auf die jeweilige Situation; 2) die Reflexion stürzt den Menschen in unbestimmtes, verwirrtes Handeln; 3) zu angemessenem Handeln findet er im *Vertrauen* durch *Ausschaltung* der Reflexion zurück. 4) *Setzen* kann der Mensch eine Welt nur im virtuellen Raum, etwa im Bild des Hohlspiegels oder auf der Bühne. Der Dramatiker wäre nach Kleist wohl der einzige Mensch, der eine *reale* Welt setzt. Er erweist sich als *frei*, indem er das Publikum *determiniert*.

4. グリム兄弟のポエジー概念とゲーテの形態学 村山 功光

グリム兄弟の思考には〈植物〉のメタファーが浸透している。彼らは言語・歴史・法などの〈文化〉をも〈自然に〉生成したと捉え、詩人の内省の産物である〈創作(人為)詩〉に対置して、民衆の間で自発的に生じたという〈自然詩〉を想定している。

兄弟の〈自然詩〉概念については、さまざまな影響関係が論じられてきた。特にシェリングの自然哲学との関係は、〈自然〉・〈人為(精神)〉の二元論を理解する上で重要ではあるが、その両者が反省作用を経て高次元で再び一体化する最終状態を想定する点で、兄弟どちらの思想とも相容れない。観念的の二元論を離れて豊かな植物メタファー自体を、特にヴィルヘルム・グリムが言及するゲーテの植物学との関係で考察すると、ヴィルヘルムとゲーテの親縁性およびヴィルヘルムとヤコブ・グリムの相違が新たな様相で浮かび上がる。

歴史上の現象を相対的に捉えて個々の固有性を認め、それぞれの変化に過渡期的性質を見て、さまざまな表出形態を理念的〈原型〉のヴァリエーションと捉えるヴィルヘルムの思考は、〈原植物〉を想定しすべての部分は葉から継続的に発展すると考えるゲーテの〈植物のメタモルフォーゼ〉に類似している。それに対して、歴史哲学的思考の強いヤコブは〈原型〉を歴史の実体として想定し、〈自然〉と〈人為〉の間に断絶を見てその変遷に倫理的価値判断を持ち込む。さまざまな文学現象をヴィルヘルムが超歴史的コンステレーションで捉えるのに対して、ヤコブは線的・発展史的に捉えている。

口頭発表:文化・社会2/ドイツ語教育 (10:00~12:15)

E 会場

司会:飯田 道子, 草本 晶

1. 大学南校の 1871 年刊行のドイツ語教材について

城岡 啓二

大学南校で 1871 年に Deutsches Lese- und Uebungsbuch が出版された。著者名も序文もない。葵文庫にしか現存せず, 第 3 巻があるのに, 第 2 巻はない。第 3 巻には「ワク子ル 萬國史」の貼り紙がある。活字印刷され, ドイツ文字とラテン文字の両方が使われ, 日本語はローマ字で書かれ, 巻末に単語集が付いている。現在, 静岡大学人文学部言語文化学科の HP からたどれる場所に WEB 版を公開中である。

田中梅吉『日独言語文化交流史大年表』では, 第 1 巻について, 「この和訳の語といい, 文体といい, いたって不純不熟のもので, それが洋人の手になったことは, 一読して分かる」と書かれ, 上村直己「最初のお雇い独語教師 大学南校教師カデルリー」では, 大学南校の教材が「すべて同校生徒用にカデルリーが編纂したものと考えてよい」とされている。

しかし, 日本人(教員)の関わりは十分な根拠があると思われる。

- a. ドイツ語母語話者ならあり得ないような誤訳
- b. 日本語の方言
- c. ドイツ語をラテン文字で書く際の大文字の I と J の混同

また, 第 1 巻の作成も, カデルリーではなく, 明治 3 年 10 月に着任のワグネルが中心となったのではないと思われる。なぜなら, 前年の『カデルリー文典』とは, ラテン文字の積極的な使用, 日本語の使用, B の使用法, 理系の読み物重視などの点で異なる特徴が認められるからである。

2. 初年次教育におけるコンピューター支援協調学習

(CSCL)の効果と問題点

森 朋子

協同学習とは, 他者と学び合いながら学習内容の理解と習得を目指すとともに副次的な教育的効果を意図した教育活動を指し, 教育学を始めとする多くの分野で研究されている。言語教育においてもすでに CSCL 研究が進められているが, 多くは教育工学的なツール開発が主であり, 従来の協同学習の視点に立った実践研究は少ない。本研究ではコンピューター支援の協調学習(以下

CSCL (Computer Supported Collaborative Learning)に注目し、授業改善を目的とした間接的なアクションリサーチを行い、学生の学習活動を調査した。その中でも本発表は1年間の調査の中から6回の授業に関し、CSCLが学生に与える効果と問題点について報告する。調査対象となったのは大阪大学ドイツ語教師Iが担当する共通教育の初修ドイツ語授業である。2005年度、教師Iはこれまで経験知で行ってきたグループ学習中心の授業を学習理論に則したCSCL環境へと整え直した。その結果、学生の学習動機やメタ認知能力に向上がみられ、これまで個人学習に偏っていた学生に新しい学習観を提示することに成功した。しかし個々の学生の学習過程を分析した結果、学生の中での関係の固定化や、「学び」の質の違いに関して改善点を残した。本発表では、ドイツ語学習を通じて得られるこれらの教育的意義や問題点について論ずることで、これまでのドイツ語教育研究に初年次教育の視点を加えることを試みる。

3. 外国語履修者の意識と語学教育評価

—北星学園のドイツ語教育—

佐藤 修子

北星学園大学では、今後の外国語教育のあり方を考えるために、2004年12月「大学共通科目外国語履修者の意識調査」(2年目外国語履修者対象、約800名の悉皆調査で回答者774名)を実施した。

調査目的は、(1)カリキュラムに関して—英語及び初修外国語の1・2年次必修の妥当性、(2)ニーズに関して—選択動機、最終到達目標、言語・学科によるニーズの違いや特徴、(3)評価に関して—言語能力の増進、授業の満足度、授業内容に対する学生の評価、(4)言語能力や授業満足度と、学生の意識・ニーズ・授業等との関係、を明らかにすることである。

調査目的から、学生のI.授業ニーズ把握、及び□.授業評価を調査の基軸とし、生涯学習時代の大学語学教育が一機会に過ぎないことから、学生の以前・現在・将来の□.対語学スタンスを第3の軸とする10の設問群(及び属性)から全62項目の設問によるアンケート調査を行った。数量的な分析を行うため、4・5段階のスケール評価による回答とした。

本発表では、(1)カリキュラム、(2)ニーズ、(3)評価についての主要な調査結果、及び(4)言語能力の増進や授業満足に寄与している要因の各言語についての(重回帰モデルによる)分析結果、また、ドイツ語を例に、教育の具体的内容と各言語能力の変化について、分析手法と結果を中心に論ずる。

なお本研究は「2004年度北星学園大学特別研究費による研究」の一部である。

4. Unverbindliche Besuche in Alltagssituationen

– Ein Versuch zur Nachhaltigkeit des Deutschlandjahres in Japan

Rudolf Reinelt

Um „ein lebendiges, attraktives und zeitgemäßes Bild von Deutschland in Japan“ (DinJ-Infoservice 11, 21.12.05) zu präsentieren und auch der Präfektur zu dienen (Universitätsverfassung), machen Studenten unverbindliche Besuche bei Einrichtungen und Firmen, und bieten Informationen über Technik, Wirtschaft, Kultur, usw. des Zielsprachenlandes Deutschland. Dabei ermöglichen moderne Medien, z.B. das Internet, Sprachunterricht und praktische Anwendung zu verbinden. Dadurch werden Elemente des Zielsprachenlandes in die Alltagsumgebung der Lernerkultur hineingebracht.

Der Versuch folgte folgenden Thesen und Aufgaben:

1. Die Einführung von Informationen über das Zielsprachenland und die Fähigkeit zu ihrer Ermittlung (Medienkompetenz) sind Teil des Deutschunterrichts in den Anfangssemestern.
2. Deren praktische Anwendung kann Lerner zur persönlichen Informationsvermittlung motivieren.
3. Diese Information wird von den besuchten Einrichtungen angenommen.
4. Die Besuche können die Lerner adäquat (auf Japanisch oder Deutsch) darstellen.
5. Die Nachhaltigkeit dieser Besuche (und dieses Versuchs) ist nachzuweisen für alle Beteiligten, z.B. die Lerner, die Einrichtungen, Deutsch(land), usw. Mein Vortrag zeigt, wie diese Besuche in einem Versuch im Rahmen des Deutschunterrichts durchgeführt wurden und geht dabei auf die Hintergründe ein (1), präsentiert die Durchführung und die notwendigen Materialien (2), stellt die wichtigsten Ergebnisse und Probleme dar (3), und diskutiert Folgerungen für Landeskunde und Deutschunterricht, und weist Wege zur besseren Durchführung in der Zukunft auf (4).

口頭発表:文学4 (10:00~11:40)

F 会場

司会:柴崎隆, 下寄正利

1. ヘルマン・プラウト『日本語読本』について 一口語体日本文学の紹介者

志村 哲也

ドイツの東洋学者ヘルマン・プラウト(1846-1909)の『日本語読本』(1891)とは、まとまった分量の口語体日本文学をローマ字で紹介した、恐らく世界で初の試みである。しかしその著者プラウト自身についての詳しい経歴(来日経験の有無等)は不明であり、またもうひとつの主著であり、各国語にも翻訳されている『日本会話文法』(1904)と比べても残存数が少なく、まさに稀覯本であると言える。先行研究と呼べるものもわずかに盛岡健二氏の論文一点を数えるのみである。よってまずは同書および著者に関する不明点を列挙することで、かえってこの知られざる記念碑的作品の今後の研究課題を浮き彫りにすることを試みたい。

今回の発表では特に、同書に採録された民話・講談・小説等のテキストの由来に的を絞って考察を試みる。そもそも日本においてまだ口語体文学がジャンルとして確立しておらず、ようやく坪内逍遙・二葉亭四迷らによる言文一致運動が始まった頃という時代背景に鑑みて、これは驚くべき先見性である。民話等については英訳による、いわゆる「ちりめん本」という形ですでに欧米に紹介されていたものもあるが、プラウトのものは日本の友人たちからの口述が大半であるという。また本文の 1/3 を占める三遊亭円朝による連載小説は、元々口述をそのまま速記したものであり、奇しくも二葉亭四迷がその手本としたものと同じである。プラウトがこれらを素材とするに至った経緯を、数少ないプラウト自身の言明を元に、また当時の日独関係なども考慮に入れ、仮説を交えながらも再構築してみたい。

2. Das Freundschaftsbild in der frühaufklärerischen Komödie: „Freundschaft auf der Probe“ C. F. Weißes im Spiegel der „moralischen Vorlesung“ Gellerts.

Ekiko Kobayashi

In den Jahren 1740 bis 1760 wurde die tugendhafte Empfindsamkeit zum Merkmal des Freundschaftsbegriffs. Pott weist am Beispiel von Gleim darauf hin, dass Freundschaft damals im literarischen und kulturellen Leben zum

zentralen Begriff wurde. Die Freundschaftskultur hatte einen anderen Stellenwert als Freundschaft im heutigen Sinne. Wie Meyer-Krentler erläutert, waren die Gleichheit des Standes, der Religion und des Gefühls Voraussetzung einer wahren Freundschaft im 18. Jahrhundert. Unter den „moralischen Vorlesungen“ Gellerts (1770) ist die 24. Vorlesung über die Wahlverwandtschaft und die Pflicht der Freundschaft hier besonders erwähnenswert. Im Spiegel des Gellertschen Begriffs lässt sich das Freundschaftsbild vor allem in Weißes „Die Freundschaft auf der Probe“ (1767) und in Lessings „Der Freigeist“ (1749) analysieren und miteinander vergleichen. Weiß zeigt mit Absicht die rührenden Szenen in der stark englischen Stimmung und es handelt sich darin um Männerfreundschaft, Frauenfreundschaft sowie Freundschaft zwischen Mann und Frau.

Ich bin der Ansicht, dass der Freundschaftsbegriff die Grundlage des philanthropischen Geistes bildet und somit ein Vorbegriff der Toleranz ist. Das Freundschaftsbild in der oben angegebenen Literatur wird im Kontext der Zeit betrachtet und es wird darauf eingegangen, wie sich die Idee der Freundschaft zum Toleranzbegriff hin in der späten Aufklärung entwickelt.

3. Die Erzählstrategie gegenüber dem Publikum.

Zum achten Buch von Wolframs „Parzival“ Chihiro Izumiya

Wer das achte Buch des „Parzivals“ von Wolfram von Eschenbach liest, sollte sich über die zweideutigen Erzählweisen, die der Autor in diesem Buch anwendet, verwundern. Denn hinter der Gawan-Handlung spielt in dieser Geschichte eine andere Handlung, die sich auf Vergulaht bezieht. Ferner müssen wir beachten, dass der Erzähler den Figuren dieses Buches mit ambivalenter Haltung begegnet.

Manfred Eikelmann hat auf die „offene“ Darstellungsform dieser Geschichte hingewiesen: „Die Erzählwelt ist nicht auf eindeutige Lösungen, moralische Urteile oder Hierarchisierung divergierender Sichtweisen hin angelegt, sondern auf Anspielungen und Querverweise, auf Ausfaltung eines mehrschichtigen Gesellschaftsbildes und auf kontroverse Wertediskussionen.“ In meinem Vortrag wird dieses Buch interpretiert, indem ich von dieser These ausgehe.

Aus der Analyse möchte ich folgende Schlüsse ziehen: Wolfram hat diese Geschichte, besonders deren zweite Hälfte, umfangreich in politischen Auseinandersetzungen umgestaltet, wo diejenigen unvermeidlich miteinander in Konflikt geraten, die danach streben, sich um die gegensätzlichen Interessen zu streiten und die Ehre zu behaupten. Bei der Darstellung dieser Erzählwelt versuchte Wolfram, verschiedene Perspektiven gleichzeitig bestehen zu lassen und auf die einfache Zweiteilung von Gut und Böse zu verzichten, indem er den Taten der Figuren vielfältige Motive gibt. Dazu übernahm Wolfram die klare Erzählweise Chrétien's nicht, sondern verhielt sich ganz gegenteilig. Darüber hinaus musste Wolfram diese ambivalente, auf einem flüchtigen Blick widersprüchliche Erzählweise auch deshalb besonders bei den Darstellungen der Antikoniefigur verwenden, weil er es verhüten wollte, vom Publikum wegen des unmoralischen Charakters seiner Heldin kritisiert zu werden. Diese Erzählweise musste Wolfram unbedingt hervorbringen, um diese zweierlei Ziele zu erreichen.

ポスター発表 (10:00~13:00)

G 会場

504 号室:

検定試験と留学制度のあるドイツ語コース

—小樽商科大学の場合

大塚 譲

文学部や外国語学部でなくとも、充実したドイツ語教育は可能である。小樽商大は商学部しかない地方の単科大学であり、必修の単位数は多くなく、専任のネイティブ教員もいない(非常勤のネイティブ教員はいる)。それでも常時独検2級合格者を輩出しうるのは、柔軟な単位制度、ドイツ語圏の大学との交換留学、達成度測定・学習方向付けを可能にするオーストリア・ドイツ語検定、大まかに言うところの三者の融合による。

単位制度:必修単位数は8ないし6 [ドイツ語 I=週2回4単位, II=週2回4単位か週1回2単位]。選択単位数は、各学年に応用練習の機会が1科目(4単位)計4科目16単位, 3~4年にゼミ(週1回各年度4単位, 卒論4単位計12単位)計28単位。必修・選択合計36単位。

留学:2年夏の語学留学(3~6週)と3年以降での交換留学(半年~1年)。語学留学先はバイロイト大学, 交換留学先はバイロイト大学他2大学(類似した専門分野により協定校を選定)。先方での取得単位は小樽で読み替え可(過去最高は16単位)。帰国卒業後, DSHを取得し現在ドイツの大学で学ぶ者3名。

検定試験:オーストリア・ドイツ語検定(ösd)は大学毎に実施可で試験官ライセンス取得も容易である。各級対象者は Grundstufe Deutsch=2年終了時, Zertifikat Deutsch=交換留学前, Mittelstufe Deutsch=交換留学後, Wirtschaftssprache Deutsch=MD合格後なお余裕のある者。ösdは豊富な良い準備教材が整っていて臨機応変な準備コースの実施も可能な, お奨めの検定試験である。

505号室:

Face-to-face im Netz. Video-Tandems im DaF-Unterricht

Marco Raindl

Seit dem Sommersemester 2005 führt die Deutschabteilung der Keio-Universität in Shonan Fujisawa in Partnerschaft mit dem Ostasienzentrum der TU Dresden das „Video-Tandem- Projekt“ durch. Dabei begegnen Studierende im Intensivkurs Deutsch Japanischlernenden auf der anderen Seite zu Video-Chats im Netz. Die Sitzungen finden in Kleingruppen statt – unterrichtsbegleitend.

Die Übertragung des Tandem-Prinzips auf das Internet in den neunziger Jahren hat diese Lernform weiter popularisiert und ihr neue Anwendungsbereiche erschlossen. Deutschlernenden weltweit eröffneten sich neue Möglichkeiten, mit Muttersprachlern zu kommunizieren und sich untereinander zu vernetzen. Anders als beim „klassischen“ Face-to-Face-Tandem findet die Kommunikation im eTandem meist schriftlich statt: asynchron wie bei E-Mail-Kontakten und in Diskussionsforen, oder synchron in Form von Chats, über Messenger-Programme oder in MOOs.

Projekte, die die Video-Chat-Funktion für den DaF-Unterricht zu nutzen suchen, sind demgegenüber noch relativ selten – oft wegen technischer Schwierigkeiten. Gerade für die Lernform „Tandem“ erscheint die Kommunikation über Video-Chats jedoch vielversprechend, ermöglicht sie doch mündliche Interaktion und Face-to-Face-Kontakt – trotz räumlicher Distanz.

Der Beitrag zeichnet Ziele, Ablauf und Steuerung der Projektarbeit nach, deren Herzstück eine Artikelserie ist, für die die Studierenden in Interviews Material von der Gegenseite sammeln, um es dann mit ihrem Partner auf der eigenen Seite zu bearbeiten. Über die Publikation online werden die Ergebnisse der Kleingruppen-Arbeit wieder dem Plenum zugänglich gemacht. Darüber hinaus werden die Studierenden angeleitet, ihre Lernerfahrungen in einem Chat-Protokoll festzuhalten und zu reflektieren.

Eine erste Auswertung des Projekts fußt auf einer Analyse des von den Studierenden eingereichten Materials (Artikel und Protokolle) sowie einer Befragung der Teilnehmenden. Aus letzterer ergibt sich, dass der Nutzen der Projekt-Arbeit fast durchgehend hoch eingeschätzt wird, vor allem in den Bereichen „kommunikative Kompetenz“ und „Motivation zum weiteren Deutschlernen“. Die Texte der Studierenden dokumentieren neben dem Erwerb landeskundlicher Kenntnisse und der Reflexion über kulturelle Unterschiede auch Überlegungen zum Lernprozess in (teil-)autonomen Lernsituationen. Weiterhin zeigt sich, dass der Kontakt zu gleichaltrigen Muttersprachlern im Lande auch eine Brücke zu dem (im Anschluss an den Kurs angebotenen) Sprachkurs-Aufenthalt in Deutschland bildet – und dessen Verlauf positiv beeinflusst.